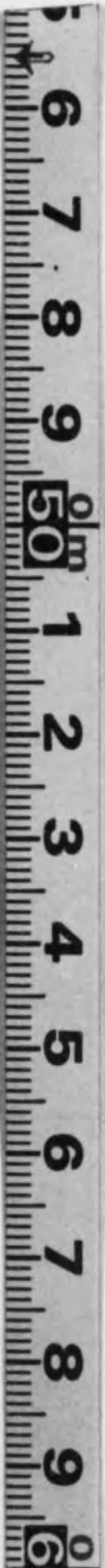


911.168-W27ウ
1200500755807

911.168
127



始



911.168

W27



若月紫蘭著

新なる黎明

新月社刊





はしがき

大正七年、十四歳の一人子の櫻逝きてより、歌をよむことが習はしとなり、折にふれては歌つたものが三千にあまる。その中より選んだものがこの歌集である。

もとより磨きの足らぬまろ／＼しい技巧のもののみであり、内容も陳腐で幼稚で貧弱ではあるが、自分が目をつむつては、見向くものもなくなるだらうと思つて、手にかけて見た。敢て世に問はうなどの念が微塵もあつてではない。例へば一坪の庭で、一個の手植の盆栽を弄ぶ以上のものではない。

さてかうして集めて見ると、貧しい盆栽でも、憶ひ出の種ともなつて、老いたる身には多少の感慨も湧いてくる。

せめてはこれを父と子の靈にさしげることにした。

終につけ加へたのは、一層まづい、妻乙女の腰折の一部分である。

昭和十七年二月十五日 新嘉坡陷落の日

紫蘭しるす

941
90
E

目次

大東亞戦争(昭和十七年)……………一
 皇紀二千六百年の歌(昭和十五年)……………三
 新年を歌ふ(昭和十六年)……………六
 春の夕(昭和五、六年)……………九
 足らはぬ心……………一五
 一 錢(昭和七年)……………一九
 昭和八年……………二九
 落葉……………三〇
 風船玉(昭和九年)……………三八
 旅人の歌(昭和十年)……………四〇
 狂人の歌……………四三
 京の歌(昭和十一年)……………五

二十年祭(昭和十二年)……………五
 南京陥落(昭和十三年)……………七
 入院の歌……………七
 新なる文明……………八
 徐州陥落……………八
 大和民族……………八
 新年の歌(昭和十四年)……………八
 漢口陥落……………八
 故郷……………九
 地獄……………九
 散華集(昭和三年)……………九
 滿鐵病院にて……………一〇
 叔父を葬る(昭和四年)……………一三
 呪蚊集(大正十一、二年)……………一六
 白風集(大正十年)……………二三

落日集 (大正九年)	133
銀杏集 (大正八年)	150
苔影集 (大正六年)	168
人形の笑 (大正七年)	175
子を憶ふ (大正七年)	189
父を憶ふ (大正十年)	194
アイヌの歌 (大正十年)	199
淡路と筑波 (大正十年)	201
落葉集 (大正十三年)	206
懸命の歌 (大正十五年後)	209
満洲の歌 (昭和三、四年)	216
香港新嘉坡の陥落 (昭和十七年)	220
新なる黎明	224
眞珠灣の九勇士	225
吾子を憶ふ	239

大東亞戰爭



皇紀二千六百一十一年十二月八日起てり日本聖戰の戈とりて

永遠の世界の平和築くべく起てり正義の守護神日本

決然と大和民族今し起つ人道の敵米英討つべく

偉なるかな宣戰の朝世界史にためしなき戦果の繪卷ひろげつ

天地にためしなき戦ためしなき大戦果かもほぎこと知らず (十二月八、九) (兩日の戦果)

宣戰二日米英東洋艦隊滅ぶ世界戦史にためしやはある

大東亞の地圖ぬりかへて輝かし皇紀二千六百年

新なる世界歴史の始まる日二千六百年二月十五日（新嘉坡降服）

香港マニラ新嘉坡見る／＼落ちて神州三千年の歴史新たなり

輝かしく世界史かざるためしなき見ずや大日本陸海軍（海軍）の威力

全世界神州男子の力見よと大東亞の天地に今武者振ふ

太平洋の制覇は成れり大東亞の新たなる黎明今明けんとす

皇紀二千六百年の歌（昭和十五年）

地の上に彌榮の國一つあり建國こゝに二千六百年

物凄き戦亂の濤は渦巻きて世界の民奉物に狂へり

新たなる世界戦史をつくるべく大和民族今起ち上る

地の上に國一つあり美しき平和の花咲く櫻の日本

地の上に悪魔狂ひて全世界焦熱地獄の二千六百年

若うどは命をかけて戦へり零下四十度の支那の山野に

すめらぎの大御稜威はも聖戦の真中に五千頁のこの書の成る
(古浄瑠璃研究三
卷成る、四首)

國をあげて聖戦の戈とれる時この書成れり大いなる國

今の今心靜かに安らかに死なんと思ふこの喜びに

今はしも心足らひて安らかにまなこをとぢて思ふことなし

新支那の中央政府は生れたり四百餘州の山河新たに

とこしへにほゝゑみつゝもとこしへに生きてゐるかも大佛のまなこ

秋雨に鹿の鳴く音のほそくと奈良の夕の靜かなるかも

生死を超え現し世はなれ病院にこもりゐて心靜かなるかも (入院生活)

手をもがれ足をたゝれて病院のベッドの上に投げられてあり (絶對安靜)

一切の自由奪はれ一塊の石ころの如くころがりゐるも

敢然と新藥トリアノンの戈とりて強敵肺炎の討伐に向ふ

囚はれの身となりて知るうつし世のはかなきのぞみにもゆるあこがれ

囚はれてベッドを天地の生ながら物珍らしく物新なり

放たれて我家に歸る路すちの物皆笑みて我を迎ふる（退院）
歸り來れば古きわが家の廣きかも物悉く輝きにつゝ
初夏の柔ら日あみて力強く朝の大地に我立ちてあり

新年を歌ふ

（昭和十六年）

あらたなる年は輝く一億の民喜びに心躍りて
年とともにいやさかえゆく日の本の年あらたなり二千六百一年

天壤とともに極まり知らぬ國日出づる國の年新たなり
國大和うねびの山の山もとにおごそかに立つ樞原の宮（神宮參拜）
大神のふみたまひけんその土を今しふむかも心うれしく
おのづから涙流るゝ樞原の宮居のまへにをろがみ立てば
限りなきかしは手の音つぎぐに畝傍の山にこだまするかな
引網の聲はさやかにほのぼのとあけそめにけり浦のあけぼの（御題）
戦のありとも見えす引網の聲のどかなる浦のあけぼの

一九四一年六月四日廢帝カイゼル鬼となりけり (カイゼルの死)

大獨逸の輝かしき望成らんとして廢帝カイゼル永久へに眠る

クレタ島陷落の報にカイゼルは最期の微笑洩らしけんかも

聲かれて咽喉のさけなん思ひにて今日も講義をつゞけたりけり

突撃の第一線に立つ心地にて檢温器もちて家を出づるも

見るくくと熱はのぼりて咽喉さけん思ひに痛む扁桃腺よ

病みて臥すこの幾日をいかるがは咽喉もさけよと鳴きつゞけをり (愛鳥)

春の夕

(昭和五、六年)

時間給の袋なげ出して笑ひつゝ妻と淋しく散る花を見る

泣かんにはあまりにつらく時間給の袋見つめて妻と笑ふも

暮れかぬる春の夕べの淋しさに妻と狙仙の猿を見てをり

とこしへに見ぬ影追うて君が歌口ずさみをり花散る夕べ (友の母の死を)

つまらなき事にかゝはりうつかりと妻を叱りて忍び泣きをり

力なく塗樋うつ雨の音の淋し春行くといふこれの夕べに
墓石にかちりつきても生きなんといいひし友焼く晩春の夕
息づまる思ひに家内もだすタラジオの喇叭歌ひいでけり
吉田屋の格子もれ来る春の夜のざわめきいとゞ淋しかりけり (大阪にて)
救世軍の女士官がべら／＼と喋りつゞけて歸りさりけり
つく／＼と見入る吾子の寫し繪は昔の儘にゑみてゐるかも (子逝きて滿十四年)
この夜は雪やつもらん腰骨のふる傷のあとほのかに痛む

あしたには治兵衛と語り夕べにはおさんと共に幾年を泣く (近松を研究して)
山桃の木に登りゐて山桃の甘汁あかす吸ひし昔は (少年時代追憶)
友達に小石を投げて米藏にほうり込まれて泣きし半日
朝な夕な木彫の伊那の踊みつ唄やきこゆと耳かたむくる (伊那人形を贈られて)
一斤の氷砂糖をぼり／＼と三日にかんで心足らはず (煙草をやむ)
酒ものまず煙草も吸はず絶間なく三文駄菓子ぼり／＼かちる
ぐらく／＼となへふる九月一日を先づ煙草屋にかけし吾かも

買占めし煙草二十を打ちすて、そのまゝ煙草打ち忘れけり

全身の毛孔が煙はくほどに煙草吸ひしも昔なりけり

ニコチンの中毒ならんをりくゝに脈のとだえのしるきこの頃
をりくゝにこの儘胸がさけるかと思ふばかりに脈とゞこほる

兩脚はをりくゝ行かず歩むことくるしくなりて路にたゝずむ

ぐにやくゝと腰のつぶれて歩むには堪へぬがまゝにつくばひ笑ふ

脚ゆかず腰の立たなくなればなれ腕だにきかばペンを放たじ

伏せんにも仰向かんにも背はいたむ夜晝起きてペンを運ぶも
燈臺の灯は近づけり大いなる錨おろさん明日の朝かも

大阪毎日新聞社より、新日本三景の一としての室積灣を歌へと求められて九首

漁火の影たえくゝに櫓の音は近づきにつゝ夜はあけんとす

夕されば海水浴の人去りて寄せては返へす波のみ白き

月の夜の白がねの波さゝゆれてふなうたゆるく船歸り來る

月の夜を波間に遠く夢のごとほのかに浮ける象鼻が崎

普賢寺の鐘淋しくも鳴りやまぬ夕べを月の海に湧く見ゆ

普賢寺の鐘は淋しもこの夕べ峨眉の山邊の秋深みつゝ

秋の陽を眞赤にあみて蛾眉山は今し夕べの海にてりはゆ

波の音は静もりかへるこのあした象鼻が崎の鐘さえわたる

村雨のしぐるゝ夕べ片はえて波間にひかる大師堂かも

蟬鳴きそな鳴きそあまり鳴くからにこの夕ぐれのいとゞ淋しも (奥利根の歌)

鳴く蟬の聲しづまりし夕ぐれの山家の宿のあまりに淋し

日の入りてたそがれかゝる谷あひに光惜しみて蟬鳴きやます

奥利根の河瀬の音の夜すがらに鳴れるが中に蟲一つ訝ゆ

足らはぬ心

五十年前希望の呱々の聲あげて珠玉とめでられしこれが吾かや

中學の門を始めてくぐりける朝の希望のこれがミイラか

吾生きてありと吾が身をつねりつゝ叫びて心足らふといふか

このおれは生きてゐるのかと折々に眼をとちてつく／＼思ふ

五十年を夢みるが如く／＼と眠りつゞけて今日覺めたり

あさましやまことに生きてありといふ日を幾度か救へたりけん

こんな事で生きてゐるてふ喜に心足らふかと腕なでてをり

こんな事で生きて居たとしいへるなら餘りに永く生きてありけり

一生の終りに近く夢さめて路のあまりに遠き歎かひ

こんな筈ではなかつたのだがとかへり見る路はへの字に曲つてゐるかな

さても／＼大きな顔で生きて來し蛇に恐れぬ盲ならぬに

幾年の後にあらんこれの身のありかを人の知らぬ夕べは

ゑらさうに鹿爪らしい顔をしてのんべんだらりと生きて來しかも

果知らぬ野中の路にしよんぼりと立つ我影の長き夕暮

果知らぬ夕の秋の縣道に淋しき吾の影暮れんとす

この宵も人を呪へるこの心裂けもはてよと自ら呪ふ

君しばし物語り待てぼと／＼と涙流れて聞くに堪へなく

子の墓に詣でて妻は西にありこの夜淋しく眠られがたく
床にゐて腸の痛にあえぎつゝこの暑き日を煮らるゝ如き
わが病める痛に妻は油汗しぼりつゝ一心に祈りゐるかも
かばかりの痛に何ぞ泣かんやと笑うて何時か寝入りたりけり
太平洋を昇る朝日に呼かけし日蓮の聲なほ波にきこゆ（房州小湊にて）
大波のしぶきをあみて海の面に群がる鯛を見たと舞ふ舟
海の面に集る鯛の群見たと波のうねりにもまれゆく舟

一 錢（昭和七年）

一錢を奢つてくれと三味線を弾きてはなたれ娘が來たり
この寒き夜を縁日の街中にひれ伏して婆々が錢を乞ひをり
ぼろ／＼の浴衣着て地にひれ伏して錢を乞ひをりこの寒き夜を
薄暗の冷たき池に死にかけた金魚くる／＼亂舞してをり
松茸のほのかに匂ふ店先に立ちて財布の中をよみけり

三味線のラジオの音に誘はれて籠のインコが競ひ鳴くかも
舞ひ狂ふとんぼの群は青空の深みの中に吸ひこまれけり
方四丁に煉瓦の高壁めぐらしてなにがしさまの別邸立てり
方四丁の煉瓦の壁を遠見つゝ目を丸うして子等の立ちをり
あさましき吾のこゝろをあざけりて除夜の鐘の音しきりに鳴るも
日々の飯のほしさにもえさかる憤ろしさ我慢しにけり
たんくと雪解の水の塗樋をうつ音かろくと日はかゞやけり

高らかに錢よむ聲の亂舞する夜ふけの年の暮の銀行
春の夜のそゞろ歩きに思ひ出の町から町をさまよひにけり
思ひ出の門にぼんやり佇みて大きな犬に吠えつかれけり
うらかな楽隊の響靴の音街ゆるがせて過ぎ去りにけり
午後二時の風月堂の窓に立つわが腹の蟲のうなり聲かも
牛車ごとりとあかときの地をゆるがして都に入るも
妻の手のひびに見入りてこの夕べ心淋しく黙しゐにけり

馬鹿踊ぼんやりとして見てゐつゝいつしか口をあけゐたりけり

馬鹿辰と嘲けられつつ二十年踊の太鼓叩きける男

馬鹿踊見つつしいつかひよこゝと鼻たれ小僧踊り出しけり

植えかへし水蜜桃のかれゝに五月といふにいまだ芽ぶかず

百尺の煙突の上に鯉つりて朝の亂舞にあかず見入るも

馬鹿踊をどる心をうれしみて夜の更くるまで見て居たりけり

ぼんやりと物思ひつつ街ゆきて馬鹿と一喝喰はされにけり

血まみれて歸りし犬の泣かなくに心しみじみ妻の泣きをり

人いねてネオンサインのゆる／＼と廻るともなく廻る曙

やり場なき憤ろしさいやさなと聲はりあげて歌ひたりけり

やり場なき憤ろしさいつとなく笑となりぬ語り合ふ間に

先生のいびつな顔が氣に入りてひひひと洩らす三角な笑

物くれとバチバチと打つ猿の手の音輕げなる植物園の朝

あやまりて錐指先を貫けり如何にぬかんとじつと見つむる

共に棲みし三十年の今夜かも皺に見入りて妻と笑ふも

ゆふべ買ひしシヤボテンの花この朝はべそりしぼみてうなだれてをり

一夜さの盛り誇らふシヤボテンの花いとしみて妻は買ふかも

昨日買ひし二圓の緋鯉あれ〜といふ間に呼吸をやめて浮べり

昨日買ひし六匹の鯉が大いなる屍を池に横たへてをり

チンドン屋が眞夏の町を踊りゆく姿いたまし見るに堪へなく

いたましきむくろを投げて籠の中にゆふべの螢薄光りをり

ちんどん屋の踊り狂うて町を行く足なみ見つゝ涙やまなく

くね〜と脚をひねりてチンドン屋へと〜になつて踊りつゝゆく

あさましと見つゝ立ちてチンドン屋の眞剣な瞳に身慄ひにけり

生きるのだ生きるのだよとチンドン屋の眼ぎら〜輝きゐるも

眞白にお化けのやうに塗り立てゝチンドン屋の老夫婦踊つてゐるも

チンドン屋の鉦と太鼓の音の底に生きなんとする力漲る

一日を踊りつかれてチンドン屋しよんぼりとして歸りゆくかな

チンドン屋の長き行列へとくと町をいゆきて秋暮れんとす

五百歳の身を燃えさかる火に投げて見るく、生れ變る不死鳥 (不死鳥の歌)

因襲の塊の身を火に投げてあらに生るるフェニックスはも

五百年の因襲の衣ぬぎすて、身もかろかると若き不死鳥

繰返しく、身を焼きかへて死ぬこと知らぬとこしへの鳥

身を焼きて新なる生命いきかへる力強き鳥とこしへの鳥

十年の新なる年迎へつつ死ぬこと知らぬこれの不死鳥 (吾が雑誌不死鳥を歌ふ)

不死鳥は今し新に羽ばたきて新なる年に生れ出でたり

悠然と靜かに高く聲はりて天地に鳴くこれの不死鳥

おほらかに眞理の聲をはりあげてとこしへに鳴くフェニックスかも

五十年千年の世を何かせん永久とこに高らかに鳴くフェニックス

己が名も年も忘れて他愛なきまだ四十七のこれのルンペン (ルンペンの歌)

食券が貰へないとして夜一夜泣きつづけたるこれのルンペン

食券が貰へたりとしてこれの朝踊り狂へる老ろくルンペン

弔はん人もあらず軒下に犬の如くに死んでゐしルンペン

引取の人もあらずしよんぼりと解剖臺に寝てゐるルンペン

これの日も雪ふりしきりルンペンは食むに物なく黙し寝てをり

秋雨のしとゞ降る朝ルンペンは肩籠背負うて泰然とゆく

にこくとほゝゑみながらぼつり／＼物云ひし顔の忘れなくに
(宮嶋五丈原を悼む)

大方は病いえぬとたより來て月もたゝぬにあはれ五丈原

死にとむな地に嘯りついても死なぬぞといひし義顯がゆきて一年
(友松本義顯逝きて一年)

刈取れる稻田の中にぼんやりと忘られてゐる雨のかゞしはも

昭和八年

まとゐせる人の子の寫眞羨みて見つむる妻を見るに堪へなく

妻の弾く三味線の音のこの夕泣くがごとくに胸をさすかな

淋しさのやるせなければぼつん／＼とおぼつかなくも妻の三味弾く

妻死なば間借りなどして住まはたと語ればわれもと妻のいふかな

吾れ死なば何時か死なんと死ぬ時を待わびてあらん子のなき妻は

この後を何の望にいつまでか生きてあらんと三味を弾く妻

出つ入りつ入りつ出つ来つ来つ去りつ街路に似たる民事法廷

法廷の中庭に咲く菊の花見る人もなく霜がれんとす

呼びかけてマイクروفオンの前に立てば友の笑顔のぼんやりと見ゆ

長唄のラジオにうつらきゝ入りて物縫ふ妻の針とだえつゝ

この朝人といふ人ほゝえみて物いふ聲の和らぎきこゆ (元日)

うとくと歌舞伎見てをり静なる新しき年の元日の午后

この日はどんよりとして人も来ず留守番しつゝ一人碁を打つ (二日)

蠅逐うて日向ぼこりつヴェランダに賀状見てゐる一月三日

地の上に河馬が乗り出し来つるかど洋装美人見つめたりけり

ふと見たる化粧バッグにボンくとチヨコレートとがかさばりてをり

散る花をあみで立ちをり振袖の女暮れゆく空に祈りつ

散る花をあみつゝ花の下蔭に體操してゐる女學生かも

散るからに風吹くからにはら／＼と流るゝ水と花きほひ散る

水底にうつらふ花の影追うて心地よく散る櫻花かも

眞盛りの花のトンネルすれ／＼に飛行機の飛ぶ小金井づゝみ

かばかりに親しかりしを見る事もほと／＼あらぬ友となりしか

若き日の文焼かばやと取りいでつ幾度箱にをさめたりけん

わがやりし文悉く束にして焼くには惜しと返し來にけり

若き日の文とりいでゝ若き日の思ひにふけりまた焼きかねつ

五十年の昔の繪巻くりひろげ若かりし日をしのぶ文かも

繰りかへし讀みけん若き日の文を焼かなんとしてまた拾ひよむ

秋の日は文をしよむにふさはしき若かりし日はかなき文を

草花は買ふによろしもこの先を幾年生きむ草鉢買はん

命かけてめでつゝありし君子蘭枯れ腐りけり吾も死ねとや

年毎に植うる櫻の枯れてゆくわが子櫻の靈とむらふか

月の夜をわが影ふみつとぼとぼと一人淋しく武藏野をゆく

落葉

秋の陽はさやかに照りて池水の底にうつらふ金魚の影はも

これの世にせめて一日は心からまこと生けりと笑む日のあらな

これまでの歡びといふ歡びのあまりにあはくあまりに空し

これの日が今終るぞと蝸が聲を限りに鳴きさけぶかも

ある時はドロップ噛みつ眠たさをたへたとぼく／＼ペンを走らす

ぼつりぼつり駄菓子はみつゝしよんぼりと机によりて首かしげをり

一心にしやぼてんの鉢みつめつゝ日なたぼこりに耽る午後はも

校正の出る日をまちてやるせなく獨りしよんぼり新聞碁打つ

子のやうな木谷五段に首たれて井目おいて碁の道をきく

教壇に立ちてしみぐゝ人生を説きつゝひそに泣くこと多き

いたづらに生きて來にけりうつろなる五十四年の退屈さかも

願みて心足らひて死なん日はむしろ盲目の昨日なりしか
うつろなる現し世の命百年を恥らひもなく長らふる身か
たゞ食らひ只飲むがまゝに生くといふこの淺ましき身を何に例へむ
落葉ぬぐこの青桐は來ん春はまた新なる芽をふくらんを
落葉掃き掃きつゝ思ふこれの世は落葉掃きつゝ死ぬにふさはし
せめて我がこの本成らば安らかにその日その儘死を厭はんや
二千枚の原稿終へて校正の出る日まちつゝ生きてあるかも

がばかりの仕事はわれにふさはしきみみに劣るこれのわが身に
願はくば我が書の顔を見て死なん生きよとほかに願ふものなし
ゑらさうなこと説きながら近松を知らず沙翁に掌を合す人
國と國と向ひ立つとき人間はブルドツグのやうに血に飢えてあり
入場料を高くし思へ落葉ふむこの靜こゝろを錢にかへんや（豊島園四首）
人稀な八萬坪の秋の庭を思ふこともなくとぼく歩む
丘に上り水に下りつ紫外線たんまりあみて心靜けく

冬枯の武蔵野はよきぼんやりととぼけ顔なる月ものぼりて

風船玉 (昭和九年)

はりつめた風船玉をさながらの五年を更に生きなと思ふ
このちを幾年生きんはりつめた風船玉に似たる幾年
氣のぬけた風船玉をさながらの餘りに長き一生なりけり
脱殻のやうな顔してゑらさうに氣焰を吐いて生くる人々

大いなる人間といふ看板を飾つてはをれ淋しさうなり

看板は小さきがよしいたづらに看板ばかり太きはかなし

大看板のペンキがはげてトタン板の地金の見ゆる大政治家はも

看板のペンキがはげて消えてゆくゑらい人ばかりの浮き世なるかな

風船玉さながらのやうに針の先でべしやんこになるゑらさうな人

下らない事ばかりにかかはりて生きてゐる人が羨ましけれ

五十年飯だけは食つて生きゐたれこのまゝ死ぬは餘り恐ろし

こんな事でまことに生きてゐるのかと思ふ時涙溢れくるかも
わが父は只酒飲んで死に、けり生きてゐたのかと淋しく思ふ
こんなことで死んでいゝのかと思ふ日は黙りこくつて物も得言はず
この四五年生きてゐたりと泌々と思ひつゝ校正に餘念なきかも
ゑらさうなことばかりいうてうつろなる世を生くる人にあやかりたけれ
こもらひて初日浴みつゝ窓際にゆつたりとして新聞を読む
國をあげて仕事をやめてゆつたりと家にやすらふ一月一日

われ紫蘭まこと生きてたり千九百三十四年一月一日
われまさに生きてしありと叫ばなん千九百三十四年
かぐはしき初日拜めば涙わくに更に新に生きんと思ふ
動もすれば自らの幸祈らんとする醜き心燃えさかるかも
生甲斐のある身を生きな人類の一人としての甲斐のある身を
我のみの幸のある身を何にせんあまりに小さき自らの幸
一夏を家にこもりて一心に書つゞけたり五六百枚

何の爲にペンを執るかと人とはば死なんが爲とすぐに答へん

安んじて死なんが爲に一心にペンを執りけりこの一夏を

一心に机によりてひと夏を今年はまだこと生きてゐにけり

一日の悔もあらず一心にペンを運びしこれの一夏

むざ／＼と痛む頭をかゝへつゝ床につきしは幾夜なりしか

眼をあけて物見えぬまで物讀みし夜は安らかに眠りたりけり

五十幾年生きてやうやく生きてありと思ふことありペンを執りつゝ

妻と吾となき子と三人たべよとやたつた三つの柿がなつたり

來ん年は來ん年はと妻に契ひける富士の麓の五湖廻りする（五湖廻り）

いま右に見えぬと思ふ富士の山左に今は聳えてゐるも

ブルジョアの別荘ばかりあれこれと船頭殿は問はず語りす

バスとボート走りつゞけて五湖廻りの夢淺ましく覺め果てにけり

風穴に下れば眞夏眞晝間のうつそ身も心も凍らんとする

蠟燭を片手に立てば風穴の地獄の闇に氷柱光れり

呼びかはず聲のみしるく人顔のほのかに見ゆる富士の風穴

風穴を出れば眼鏡くもらひて煮え湯の中に立てる心地す

これやこれわれ等の住める大地かと眼鏡をとりて見まはしにけり

(風穴を
出で)

富士見ゆと呼ばれて縁に立ちにけり目をこすりつゝ午前正五時

刎ね起きて窓にし立てば大いなる素裸の富士目の前にあり

大いなる富士の姿の黒ぐろと澄みたる空にさやに立てるも

大いなる富士黒ずみて目の前に黙して立てりわれ言葉なく

眞黒き素裸の富士青ずみて晴れたる曉の空に聳ゆる

まだあけぬあしたの空に黙し立つ富士仰ぎつゝをろがみゐたり

薄白き雲のみ空を背にしてさやかに立てり大いなる富士

淋しげに一羽の鳥高らかに鳴きつゞけをり富士晴るゝ朝

晝顔のあはれに咲ける葉の蔭に鳴きつかれたるきりくすかも

湖のほとりの家は皆いねてこほろぎばかりなきしきるかも

大いなる星地に落ちてひんがしの國この夕べ闇となりけり (坪内博士を悼む)

旅の歌 (昭和十年)

加茂川のみのもにけむる春雨の音なき音に夕べきゝ入る (京都にて)

春宵の巷にたちてうつとりと聴きとれてゐる京訛りかも

やはらかき京の訛にききとれて心ほほゑむ雨の春宵しゅん

花ちかき櫻の下を旅に來て心かろ／＼そゞろ行く夕

今宵また櫻の下に立寄りて咲く花をまつ圓山公園

今日や咲く明日にや咲くと旅に來て祇園の櫻また見に來たり

日曜の今日の人出の幾萬ぞ花咲きそめし圓山公園

櫻咲きて祇園の山のさわめきつゐるにはたへぬ山となりけり

都踊ぼんかんとして口あけて仰ぎゐる間に終りたりけり

山がらのしみしみと鳴く聲さえて大比叡の嶺の静かなるかも (比叡山にて)

呼びかはす人の聲はもこだまして大比叡の嶺静かなるかも

大比叡の嶺にしたてば山雀の細きさゝやきさやかなるかも

琵琶の湖眼下に見つゝ妻と二人思ふことなく草餅かぢる

この儘にケール切れて落ちたらばをかしからんと眼をつふるかも (空中ケ)

今ははや扉をさせり明日來よとつれなき僧の言葉少き (石山寺にて)

源氏の間既にさせりといふ僧のつれなき聲の高らなるかも

鐘の音はいまだも寒し石山の花に間のある春の夕暮

つかれたる脚やすめては石段に立ちつくしゐる妻の顔はも (三井寺にて)

つかれては石段に立つ妻呼びて指さす琵琶の湖暮れんとす

辨度の方餅賣る茶店あり人すれのせぬ娘茶をくむ

暮るゝにはいまだ間のあれ本堂の扉さしゐる僧の若しも

今朝までも床に臥しけん君ならしわれに遇はなと訪れ來ます (大阪にて晴子夫人訪る二首)

旅に來て君見る心ありがたき金より外に友なき旅に

神戸から幼子抱きて訪れし君に向へば涙ながるゝ (なを子夫人訪る二首)

子を抱きてしよんぼりとして行く君を呼びかへさばやとふりかへり見る

旅に來てつれなき人は嬉しけれ思ひ餘らば去りがたからん (大阪の宿の人を)

萬年草怪しみながら買ふて來ぬ怪しきもまたをかしからずや (高野にて)

宿かりて回向の金をねだらるゝ夜の寒しも花の近きに (寺にやどる)

たそがれの春の夕をとぼくゝと車に乗りて山に入るかも (奥院への道)

闇の中に聳ゆる伽藍見ずやとて提灯かざす車屋なるも

暗闇の金剛峰寺の庭に立てば囁みつくごとく小犬吠ゆるも

町も山もひつそりとして暮れてゆく高野の春の静かなるかな

今さらに立寄る人もあらなくに灯のともりゐる女人堂かな

乗り遅れて名も知らぬ里の公園に盛りの花を見にのぼりけり (高野口とやらいふ驛に導かれて)

まだ早き花をたづねてゆくりなく鶯をきく吉野山かな (吉野山にて)

何となくあはれ深しも柔らかき誰がつきにけん如意輪寺の鐘

時ならぬ鐘のあはれにきこえけれ如意輪堂の春の午後二時

花の上を鐘の静にわたり來る吉野の里の春の夕ぐれ

如意輪寺の鐘はかなしもこの鐘をまたきゝに來ん花の咲く日に

谷に下り谷をのぼりて如意輪堂の扉見に來ぬかなしき扉

如意輪寺の鐘の音きゝにまた來なんいたましく鳴る鐘の音ききに

たがつきし鐘にやあらんたえくゝにゆるく流るゝ如意輪寺の鐘

をろがめば心すがしも何一つ思ふことなく拍手をうつ（宇治山田にて）

をろがめば涙ながるゝ拍手は木魂にさえて心すがしく

拍手は木魂にさえて風なきに眞白き扉ほのにゆれつゝ

薄くらき鯨の城かも日に映えて鯨のかゞやくこれが城かも（名古屋城にのぼる）

鯨ほこの城はこれかも旅人の心ひかるる城はこれかも

和立海は見るくゝ闇にのまれゆく海の廣さよ闇の深さよ（鳥羽にて）
繪に似たる鳥羽の鳥山くら闇にのまれて細き灯となりにけり

狂人の歌

命かけて机によればびりくゝと體いたみてたまらぬ夕べ

今になつて狂人の如くこつゝと圖書館に通ふ吾はをかしも

老ぼれが何しに來たと圖書館の守衛が吾をすいかするかも

若人にまぢらひにつゝ老ぼれが圖書館に入れば人眼を見はる

吾が仕事成らず人々手を打ちてあざ笑ふ日もちかきにあらんか

世離れた仕事と笑へ世離れぬ仕事にばかり尊さがあるか

わがいゆく一本道は眞直ぐに輝きてあれ果ての遠しも

一生涯下積みになつて死んでゆく人思ふ時血は沸きかへる

この體朽ちなばくちねこの仕事よるひる命かけて續けん

腹一ぱいに飯食ふためにこつくと働くことにあきはてにけり

徒らに飯食ふ爲めに五十六年働きて來しわれ動物よ

善良な民とし生きて五十六年飯食ふ爲に只かせぎぬし

百年を只飯くふて生きてゐる人を學びてわれも生きんか

本を買ふ金の惜しくて講義きかず廊下うろつく女學生かも

手の先の仕事に心ひかれつゝ心めしひてゐる女かも

己が子にはゑらいものになれと教へつゝ何がゑらいか知らぬ女よ

まことには生きる力のなきものが飯はむゆゑに生きてありけり

嫁ぎては歌もよめぬといふ女口には飯を食みてゐるらし
頭には飯食まなくも生きてゐる動物ばかり殖えてゆくかな

京の歌

(昭和十一年)

醍醐寺の寶物館の國寶に向ひて立てば秋靜かなり

その昔わが歌ひける歌ありと忘れし歌を吾に歌ふも、

夕暮の鳥邊の山に妻と二人お俊の墓をたづねわびつゝ

文珠堂の鐘の音ゆるく夕靄に包まれてゆく天の橋立

橋立の砂にまろびてうつし世を忘れて妻と柿の皮むく

柿を賣る店一つあり高雄山の紅葉ほのかに色を見せつゝ

鞍馬山このあたりかも牛若が天狗と夜な／＼相撲とりしは

鞍馬山の峯の岩根に妻とゐてパンかぢりつゝきく鳥かも

千年の昔ながらの魔王堂にたきつぐ香の靜かなるかも

鐘づくに思たへなく若き尼撞木にぎりて立つくしをり

黒染に身をつゝみつゝあかゝと炎ゆる思ひと戦へる尼

經やめて鐘をし打たん力なくぼんやりとして佛に向ふ

町に出てて歸らんことを忘れつゝ巷に立てる若き尼かも

大自然の墨繪に似たる橋立の濱にさすらひて去りもあへなく

繪の中の人となりつゝとぼ／＼とさすらふ秋の橋立の濱

橋立の松數へつゝとぼ／＼といゆけば秋の日は暮れんとす

ほがらなる鳥の鳴く音にさそはれて門札をよむ屋敷町かな

只一輪花咲きにけり鉢植の百日紅の小さき枝に

びつこひきつ一人はなれてゆく娘あり淋しき瞳忘れがたなく

このあした雪にまろびて張つめし憤怒の炎消え去りにけり

このあした病室の窓打ちあけて三月の風胸一ばいに吸ふ

鶏の聲ほがらかに遠ひゞく二月の朝の日本晴かな

三月の三日なるかな日すがらの裏の市場の樂隊の音

悲しげにホロ／＼鳥の鳴き鳴けり花はら／＼と月に散る夕

悲しげにホロ／＼鳥の鳴きてをり動物園の花の散る夕

夕暗の花のもと行く美しき人泣きてあり花にそむきて

しみ／＼と妻が読みをりありし日の亡き子の書ける日記の一節

二十年前の亡き子の作文引出して妻が泣き／＼読んでゐるかな

二十年前の昔のおもちや取り出で、亡き子を憶ふその誕生日

がたバスのフルスピードに走りゆく青葉の村の砂煙かも

夜すがらを人のさゝやく聲のして眞晝に似たる月今宵かも

月今宵風に音なく白楊の輝く葉なみさゝゆれてをり

月今宵ふと仰ぎ見る白楊の葉影はゆれて風に音なき

ふと仰ぐ月今宵かも松の葉の数のさやかに讀みつくさるゝ

このあたり富士ありといふ霧のあなた仄かに夕陽輝きて見ゆ (高尾山)

秋來ぬと眼にこそ見えねしみ／＼と心の底を打つ風の音

一心にペンをかりつゝはたゝ神狂ふをうつら聞きゐたりけり

神鳴の叫び狂へるこの夕べたゞ眼をとちて思ふことなき

寫し繪の妻の瞳に見入りつゝこれが死ぬのかと思ふこの朝
うつしゑの亡き子の瞳見つめつゝさゝやく妻の聲のさびしも
鯉こくに舌鼓打ちつ寫し繪の父にさゝぐる一椀の汁
恐ろしき颱風警報の夜はあけて窓にさし入る光静けき
心こめし菊の一鉢咲きにけり願ひしよりも花大らかに
このあした妻は黙して物いはず恙なかれとひそかに祈る
このあした思ふことなくヴェランダに小春の陽あみてうつらくす

二十年祭 (昭和十二年)

大いなる悲すぎて二十年なほ新たなりまことの悲・
五十八年顧みて眞一つあり癒しがたなき一つの眞
これの世の一つの眞と思ひながら信じがたなき吾子の死かも
日々に歸りや來ると待ちにつゝ空しく過ぎし二十年かも
かばかりに悲しきものと知りもせばその日に共に死ぬべかりしを

花の如く清くし散れと名を呼びて櫻とつけし子にはあれども
手にふれて脈のなかりしたまゆらは姿見つめて物もいへなく
魂さりしあこのなきから茫然とみつめて立てり石像のごと

生きてあらは三十四年の己が子に脈をとらるゝ日もありけんを

二十年の昔の涙新しく雨のひた降る三月十二日

二十年の昔の繪巻くりひろげ涙のみつゝ妻と見てをり

生ける子に物いふごとく寫し繪と妻は語れり朝夕べに

理窟づけて百年の命ながらへて吾れ生きてありと何を誇らん

限りなきゼロを重ねて百年の後には一になし得んものか

五十八年飯はみ來たりこの上に幾年飯をはまんとすらん

もつたいぶつて生きては來たれ人類の文化の波に漂ひにつゝ

ひよつこりと生れてぼんやり飯はみて何時とはなしに消えて行く身か

われにつらきこれの心の誰にかはやさしからんと自らあざける

一卷の本いまだ成らず安らかにこの三年の眠りがたなき

命かけて心こめたるこの本の成りてはてなく眠らん日もがな
騒がしきチンドン屋の音絶えはてゝ静かなるかな一月一日
外套をぬぎて路ゆく人のあり春立つこれの朝の嬉しも
下手くその女優保名をおどりをり足も動かす手も動かなく
大佛の盗み賣らるゝ春なれやたのみがたなき人の世なるかな
しめやかに春雨ふりて籠の鳥をりくゝ鳴けり日曜の朝
曇日の霏にすはれて立のぼる焚火のけむりはても知らなく

柿の木に鳥とまりてこの一日鳴きもあへなく去りもあへなく
思ひなき心に澄める大空を仰ぎて春の輝に酔ふ
眼の力日々に衰へて燈に讀む新聞の字の影うすらなる
立ちこむる霞の中に鳴く牛の喜びの聲野に響きわたる
狂へりと人をのゝしる心また狂ひてありとのゝしられけり
この心盡し足らずと恨む人の顔を見つめて言葉あらく
やゝ慣れし小鳥は籠を忍び出て庭に歌へりのびくゝとして

埋火は消えはてにけり結ぼほる心いだいて床にもぐらん

薄ら陽のほのてる中に街燈の光寒げに消え残りをり

東京をよく物語りける風呂番の現し世になき爺の顔はも（仙臺にて）

風呂番の爺の話にあこがれてまた來しものをこのはたごやに

流れ來てこのはたごやに風呂たきて世を樂みて爺はありしに

柔かに初夏の陽のてる青葉山しば郭公なきて靜けき

鶯のほがらなる音にさそはれて杜鵑なく青葉山かも

賑かに家建つらしも新しき木の香霞にぬれて漂ふ

春の雨そぼふる中を賑かに家建てゝをり槌の音高く

下諏訪の社の馬場の大杉の並木の行衛たづねまどふも（諏訪町）

大杉の並木は折れて影もなく寂しく立てる石鳥居かも

初夏の朝の風に夢のごと廻りし風車の影懐かしも

我が思ひそのまゝのごとうとくとめぐるともなくめぐりし風車

大杉の切株に妻と腰かけて共に歌ひし亡き友憶ふ

戦友の肉のかけらを夕月に淋しくさがす武士の影（支那事變五首）

戦友の數をかぞへて涙ぐむ班長のあり夕べ寒きに

戦友の數讀みかへし／＼足らはぬ數に泣く兵のあり

大君をたゞに一聲ことほぎてとこしへに散るますらをの胸

國を思ふ思ひに燃えて爆彈を抱いて消えしますらをの影

旅にゆく人羨ましとこしへの新なる旅にたちてゆく人

新しき國から國へ野から野へ旅をつゞくる汽車はなつかし

骨拾ふ杉割箸の先にふるゝ骨の響の澄みて身にしむ

叔母の骨手ん手に拾ふ火葬場の窓にしみ／＼降る秋の雨

ふとしては思ひもかけぬ思ひ出に思ひもよらぬほゝゑみもすれ

南京陥落（昭和十三年）

隣邦の都南京陥落す日出る國の大御稜威はも

八千萬の民聲はりて萬歳を謳ふよ南京陥落の今日

南京の都落ちたり萬歳を叫べは歡喜の涙流るゝ
五千年の歴史を誇る大支那の國亡びんとす都はいづこ
しかすがに涙流るゝ隣邦の都陥り國亡ぶ日よ
肉彈の小さきかけらに日本の民生きてあり國輝けり
一握の飯分けあひて隊長と兵とはみをり塹壕の中
肉彈の雨と散りゆくたまゆらに人人にあらず國つ鬼神
夕やみの吹雪の中にさ迷ひて倒れ果てける電報配達

籠をぬけて飛去りにける頬白の歸り來てまた籠にとまるも
大砲の炸裂の音天に地に響きて東亞日々にあかるく
旗手と共に水杯をくみかはし聯隊旗に別れゆく隊長

入院の歌

(昭和十四年)

忽然と怪しき痛み襲ひ來て腸を斷たるゝ思ひありけり (二月一日)
一大事身に迫り來る心地して印刷いそげとペンを走らす (二月二日印刷屋へ)

恐ろしき豫感に涙はら／＼と流しつゝ妻は吾を負ひゆく

今しわれ消えゆくらしも従容と笑つて天の命に従はん

われ死ぬと思ふたまゆらぶる／＼と總身ふるえて赤き血吐き吐く

消えてゆくわれ返へさなと寝もやらす盡せる妻の面やつれはも

わが家に歸り來る日はなからんとふりかへり見ぬわが家の門（寢臺車門を出づ）

われゆくとな泣きそ妻よはら／＼と花一片の散ると笑へよ

うからやから集りてあり吾がそばにわれ死ぬらんと思ふ朝を

だく／＼と紅き血吐きて見る／＼にわれの命の消えてゆくらし

一滴の水のほしさに幾夜かをもだえたりけん堪へつゞけけん

うがひする水はうましも一滴のほのかにのこる甘露なるかも

十八度の病室に冬をこもりをり人形のごと動きもあへず

我が病めば人皆の目のうるほひて贈られし花泣くが如しも

この儘に消えてゆくらん命かも淡々として思ふことなき

わが仕事の九分九りん成りてわれ逝くかまことに人の世にてありけり

澄みわたる大空の如き心地にて泰然として眼をとちんかな
今宵はも妻よなきそわが魂の靜に天に歸るといふに

荷はれて靜にわが家出で、ゆく身の歸る日はとはになからん
わが魂は仄かに迷ふけむりかな何處にゆくとわれも知らなく

眠れども死ぬとしもなくものいへど生くとしもなき四日なりけり（入院四日）

吾死ぬと思ひける朝わが友はかけつけにけり吾泣きにけり（泉君來訪）

しやくり上げてうれしさにわれ泣きにけり友の腕をにぎりしめつゝ

しみ／＼とわれ生きてたりと思ふ朝歡喜の歌の溢れ出るも

あしたあしたバンのかけらのふやされて生きゆく力日に蘇へる（二月十八日）

病み臥してあらはなりけれ人の世の人の情と人の心の

一たびはきゆかと思えし灯のほのかにもえてよみがへりけり

一片のバンのかけらをかみしめてよみかへり來る歡喜に酔ふ

ほんのりと残んの月は病室の窓にのぞきて影の淡しも

ほのかなる喜び妻の顔に見ゆわが病やゝ怠りぬらし

わが命に己が命を代らなと祈れる妻の目の光かも

思ふ事もなす事もなくぼかんとして疲れたる目に日の影を追ふ

外の面には人住む家のあるやらん寂々として物の音なし

風あれて雪ふるらしも時の鐘一つは遂に耳をそれけり

フリーチアの香ほのかに病室に漂ひてをりうつらまどろむ

南瓜の柔き味しみくと舌にとけつゝ忘れがたなき (三月一日)

うましかも香りあらたなる二片のトマトは夕べの膳にのぼれり

身動きも許されぬ身となりにつゝ指をし折れば月を經にけり

シクラメン白き赤きが咲きほこる蔭に憐れなる櫻草かも

新たなる國に新たに生れ出でし思ひしみんと湧きてうれしも (退院)

口にするもの朝夕に新たなり生れ變りし喜のわく

口にするもの皆うましよみがへる大いなる歡喜胸にわきつゝ

ありがたき妻の心をしみくと味ひにけり病みふしにつゝ

新なる文明

新たなる文明は今芽をふきて大亞細亞の天地夜はあけんとす

大日輪の光隈なく照りはえて亞細亞の天地目を覺めんとす

國をあげて今默禱の一分に大和民族の心凝りたれ (四月二十六日)

九千萬の國民の涙默禱のこの一分に凝りて光るも

徐州落つ敵の堅城大徐州陷落せりとラジオは叫ぶ

全支すでに呑み盡したる日本軍漢口も長沙も物の數かは

四百餘州到る處に日章旗翻へる日近からん山河新たに

民を欺き世界を欺き神のごとく逃げ廻る梟雄蔣介石

妻逝けり二兒ゆけりとも知らずして雄々しく散りし徐州戦の花 (佐藤隊長)

徐州陷落

神か人か人にはあらし一日に徐州屠れる大日本軍

五十萬の敵の一兵あまさじと猛撃猛爆の徐州大戰

徐州落ちて漢口既に危しといふ聲きこゆ敵將いづこ

懸命に五年をかけて築きたる徐州落ちたりたゞ一日に

國をあげて命をかけて死守したる徐州陥落すただ一日に

北京上海南京徐州漢口と落ちて滅びて支那蘇へる

南軍も北軍もはた空軍も徐州に入れば敵の影なき

四面から突入したり皇軍は命かけつゝ一兵の死なく

皇軍の到る處に敵國の民皆泣いて拜みつゝあり

國亡びて山河尙あり鼠あり鼯の如き蔣が物かは

空家に狂ひ廻れる鼠かも逃ぐるを勝と誇る敗蔣

上海も南京も徐州も漢口も物かはと逃げる敗敵將軍

到る所青山ありと蔣介石鼯をまねて逃げ廻るかも

戦は逃げてこそ勝利あれと蠅のごと鼠のごと逃げ廻る蔣

悠々と世界記録をつくりけり和製無敵の大航研機

一萬千六百六十七キロを悠々翔破す大航研機

三日三夜大空かけりつゞけたり世界の英雄藤田高橋

天までものぼれと高く鯉幟あげて親には祝はれしものを（端午）

限りなき未來をかけて鯉幟に祝はれし親の祝ふ幟や

大和民族

全世界の平和の爲に戦へる日の出づる國大和民族

國をあげて見よ聖戦に奮ひ立つ大和民族の血は沸きかへる

大亞細亞の大空悠々かけめぐる制空の覇者日本空軍

魂は大空高くとはに翔けん鬼神荒鷲南郷大尉

我軍の意氣天をつく慨ありと聞く戦況にこの身も躍る

心安く靜に起きてペンを執る身を奮はして聞く戦況ニュース

益荒猛夫は戦場にあり銃後こそ我手にと立つ愛國婦人

永遠に敗將の名を残すらん愚なるかな蔣介石

デマに狂ふ國民政府滅びんとすはかなき勝利夢にゑがきて

新年の歌 (昭和十四年)

紀元二千五百九十九年の初日輝く大日本國に

萬古無比の彌榮の國日本の輝見よと初日のぼるも

新たなる文明の光ほの見えて東亞の天地あけそめにけり

死を忘れ生を忘れて國に盡す聖戰の將士また春を迎ふ (聖戰の將士を思ふ)

益荒雄は結びもあへぬふるさとの夢にきくらん除夜の鐘かも

十五億の世界の民を眼覺して天翔りけり一萬六千キロ (コンドル機三首)

一服の茶をすすむる間にコンドル機悠然として目の前にあり

四千里は二日の旅となりけり月に遊ぶ日も近きにあらん

まことなる大和の櫻色あせてバタの匂ひの土にしみ入る (日本文化の現況)

漢口陥落

全支那の大都市悉く陥落す世界に燦たり大日本の國威
一億の民萬歳を叫ぶ日や世界の民の眠覺まして
民を殺し世界を欺きて逃げまどふ人道の魔敵蔣介石
バイアス灣上陸と見る間にとん／＼と廣東落ちて世界啞然たり
全世界今し漸く目覺めんとす大日章旗の光仰ぎて
國をあげて今日日本は沸きかへる武漢三鎮陥落の夕
北京上海南京廣東漢口とつき／＼に落ちて蔣亡びんとす

大東亞の聖天子今世界史に屹然として君臨し給ふ
聖戰の勢を見よ皇軍の行くところ唯怒濤のごとし
吼々の聲この日あげたる子もあらん輝く日本世界に誇る日
世界史に輝く日なり二千五百九十八年十月二十七日
大日章旗世界に燦たる光見よこの日十月二十七日
永遠に世界の歴史飾る日よ武漢三鎮陥落の今日
地に叫ぶ萬歳の聲天上の護國の英靈笑みてうけまさん

萬歳の喜びの聲沸く蔭にほのかにすゝる涙きこゆる

故郷

古里の家はいづこぞ淋しさに地に腹這うて土の香をかく
わが生れし家はいづこぞ我が植えし松のみひとり畑にしげりて
曲り角に淋しく立ちし石地藏雨にぬれてなほしよんぼりと立つ
人訪へば五兵衛も太郎も二郎吉も皆死にはてゝ知る人もなし

我が生れし庭の土なり手にとりてむさぼり咲きて紙に包むも
をりをりは峯にのぼりて暮るゝ日を靜に待ちし古里の山
母の墓の側に坐りて半日を泣きつゞけたる若かりし日よ
朝夕に仰ぎ見し山懐しの夕日に映ゆる窓に見し山
するくゝと幹にのぼりて枇杷の實をたうべしその木如何になりけん
あした夕に幹にのぼりて山桃を頬ばりはみし山桃の木は
我が植えし五寸ばかりのむくろじは庭一面にしげりをりしが

秋來ればあしたくを裏山に松茸狩りて獨り笑みしが

朝夕に仰ぎ見し山暑き日は幾度となく飛び込みし川

本買ひに行きて本なく二十錢辻占煎餅買つて食ひけり

辻占の出るが嬉しく二十錢の煎餅いつか食ひつくしけり

十九文づゝの辻占煎餅嬉しみて小さき鏡の出るまで買ひぬ

二十錢の辻占煎餅食ひ盡して母の顔見て泣きくづれけり

試験ごとに半紙五帖の優等賞貰つて歸りぬわけも知らなく

少しばかり物の覚えがよかりけりそれが優等賞となりしなりけり

我と二人一級とんで進みける一人の友は如何になりしか

何時もかも一番なりし三之助生きてあらんか水兵になりしが

幼年校の試験を受けしその頃の聯隊長は恐ろしかりしが

父吾をほめける度にしみくと吾泣きにけり心淋しく

酒好きの父は死ぬまでがぶくと冷酒のみぬ泣く子を前に

酒やめて命生きませと子のいふに父は笑つて酒をのみけり

父に手をひかれて立ちし山頂に父と子の墓今立ちてあり
村境流るゝ川を見下ろして靜に父母の墓立ちてあり
父と母と我子の墓と並び合ひて白々建てり山の頂に
朝夕ゆき交ふ汽車を見下ろしてほゝゑみてあらん我子の魂は
山に海に何處にゆくに我等親子昔ながらに三人なるかな
淋しさの堪へ難き日は裏山に一人のぼりて一日泣きしか
母の墓を抱きて泣きし日もありぬ冷き石に頼ずりにつゝ

夕されば網うつ父のあと追うて河邊に立ちし故郷の夏
弟と二つの籠に荷はれて母の里訪ひし憶ひ出の道
あの家には鯉もをりしがあの家には水車あり犬も居りしが
をりくは籠を下りては弟とふざけてゆきし峠道かも
父と植ゑし小松はいつか腕にあまり庭の女王と繁りたりけり
父の建てし故郷の家をわが賣りぬ住むにはたへぬ大いなる家
父が建てゝ嬉し泣きぬと語りける家を賣りけり故郷の家

嚴めしう富樫中村翫右衛門練り出でにけり鼓につれて（前進座の勸進帳）

國太郎の義經の顔が花道に葱坊主のごとちヨコンと出たり

ふみ破つて安宅の關を通らんといふ山伏の聲のあどなさ

あらむづかしの問答無用一人も通さじといふ富樫の叫び

天も響けと長十郎のよむ勸進帳力たらへり意氣も聲はも

勝太郎の立三味線のあさやかさ吾れ日本に生れし喜び

三本の糸に流るゝ音の色の漂々として心吸はるゝ

地獄

炎えさかる焦熱地獄見すやとて全歐羅巴煮えくりかへる

偽とよこしまの世の滅びよと紅蓮の焰天地にみなぎる

地の上の物皆ほろびて新たなる土に眞實まことの萌え出でん日よ

父と母と國異りてそれゝに祖國の爲に泣いて戈とる

父の爲に母の國討つ呪はれし獨逸人の子泣いて起ちけり

戈とりて祖國の爲に戦はんと滅びゆく國の母は叫ぶも

あけ放つ大いなる室をうつろなる風徒らに吹きぬけてゆく

思ひ出は樂しをかしもひそやかに影の如くに見えかくれつゝ

忘れなと誓ひしものををりくゝに思ひ出でゝはほゝゑむ夕

仰ぎ見る瞬間に敵機黒煙吐きて眞逆様に落ちゆく (ノモハン戦)

敵の飛機九十七臺撃墜とラジオ叫ぶに湯を飛上る

山奥の温泉の町の裏家も出征の旗雨に古りたり

大方は文字よみがたく旗古りて出征の家の寂し暗しも

散華集 (昭和三年)

こもらひて春にそむける身を呼びて窓あけずやと花散りかゝる

花も人も草も大地も吹きまくる風夕なきて月のぼる見ゆ

石切りの唄は靜に流れつゝ石切る鑿の音さやかなり

つるばしの動きも歌もそろひつゝ春の光ののどかにながる

つるはしは朝の光にきらめきて工夫の歌のゆるくながるゝ

眼をとちて闇にもだせば眼の底にさゝやかなれど消ぬ光あり

やはらかき風そよ／＼と薄光る若葉の上を迂りゆく見ゆ

いらだてる心いだきて山に對へば山はしづかにほほゑみて立つ

いづこまで君を送りてゆく身ぞもゆけどもつきぬこれの大野に

ゆるやかに流るゝごとくさかさまに流るゝ如き大利根の水

眼をとちて思はじとすればあり／＼と冴えまさりゆく幻の笑

われの眼の瞳の中にひそまりてゑめばみだるゝわが心かも

終電車とくに過ぎけんワントンの笛の音いやにさえまさりつゝ

妻死にて淋しければや紅雀聲はりあげて高らにうたふ

己が子のなきからを前にな泣きそと妻叱りつゝ我も泣くかな

夏をこもり夜を日にベンをかりにつゝ人間の力をまのあたり見る

うたゝねの夢にもベンをにぎりつゝこの喜びの夏をこもらふ

暑ければかへつて心傲りつゝベン取る腕に力みなぎる

目さめてはベン走らせつうとうととベンをとれるままにまどろみもする

しみぐくと生くることをしうれしみてベンをとりつゝ夏をこもらふ

夏ごもる二階の窓の梧桐かきぎりの夜を日にのびて目路かくさんず

ベンに起きベンに寝ねつゝこもらひて東京の夏を生くる心地す

新しき帽子買はなと思ひつゝまたこの夏も半は過ぎゆく

かんかんに友が怒つてゐるらしく戸に手をかけてはいりかねつゝも

蔦の葉の硝子にうつる影ゆれてうらゝ朝日ののぼりゆく見ゆ

しんぐと骨にしみ込む音をたててみみずのなけり曇日の晝

夜を鳴きて鳴き足らぬがにこほろぎのこれの眞晝を高らかに鳴くも

眞淋しきこの荒れの日を雨風のすさめばいやに鳴き鳴くこほろぎ

堪へがたき淋しき心きけよとやこほろぎ一つまひる高鳴く

群をぬきて高らかに鳴けるこほろぎの泣く音淋しも眞晝雨の日

荒るる日をさみしみこもるこの眞晝こほろぎ一つなき死なんとす

雨しと晝ほの暗きこれの庭にこほろぎ一つ狂ひなくかも

雨の日を高らかに鳴けるこぼろぎの群をぬけるが身にしみわたる
限りなき蟲の鳴く音のコーラスに迎へられつつ月今のぼる
天地は蟲の鳴く音にあふれつつ月にふけゆく武藏野の原
わが父の逝く夕かも蟲の音のしぼとだえつついとど細けれ
武藏野の眞たゞ中にねころびて犬と半日雲を見てをり
簾あけて窓にし讀めば輕ろらかに梧桐かきつばたの葉の肩をなぶるも
よき聲のこだまにさえて箱根山さざりの中に語るがきこゆ

瀬の音はかそかに鳴りて人を呼ぶ聲はさやかに峰づたひつつ
窓あけて獨りぬる夜の蚊帳ぬちにゑみつつ月はのぞきこみたり
お役所の自動車を驅る身とならん願ひかなひて嬉しといふ友
お役所の自動車驅る身うれしとて身をそりて歩む勅任の妻
わが夫おとこの勅任官になれりとしてふれあるきます友の妻はも
何事ぞ小ぜにかせぎてそうやくに飯くふ事を眞面目といふ彼
うましげに晝寝せる妻の頬の邊に蚊の止りをり逐ひもあへざる

ありし日の子の作りける飛行船まだ抽出しにあり色は褪せつつ
山がらの鳴く音細しもしみしみと霧雨ふりて秋たけにつつ

満鐵病院にて

怪しかる音につゞきて硝子戸の千々に碎けしそのたまゆらよ（自動車てんぶく）
今の今死ぬるはをかし死ぬ時の今し來しかとふと思ひけり
轉覆の後のたまゆらガソリンのこぼるゝ音に身はふるひけり

ふる／＼と身はふるひつも立去らんすべはあらなく腰くぢけたり
乗合の人つゝがなくわれひとり腰の痛みに悩みたりしか

横臥せるこの身まてらす朝の陽は黄金山を今離れんず（關東長官邸にて）

薄色の羽の布團にほんのりと朝の日さしてそゞろまぶしも

その昔ロシアの將軍ステツセルがこの家こゝにいねたりけんか

背の痛みやゝに薄らぎこの朝は都にかへる日をかぞへ見る

室ぬちに晚香玉の香のみちてよき人來らんこの夕かも

朝顔の花日びくゝにほそまりてたけゆく秋の心ほそけれ

びつこひきびつこひきつゝ廻廊をはてまでゆきし朝の疲れよ

二月を旅にし病みてふとむすぶ水もやうやく手にしみそめぬ

この旅に死ぬるもよけれ秋たちて歸り來らんは更によろしも(満鮮の旅に立つ日)

一切をなげうちすてゝふらくゝと萬里の旅に立つ夕べかも

をりくゝは霧雨ふりて照りもやらず眞夏といふに旅によろしも(山陽線汽車の
中にて二首)

うとくゝと寝てゆく旅はをかしけれ見るものもなく思ふこともなし

薄霧にほの包まれて目の下の屋根といふ屋根に朝の日照るも

薄光る遠山脈とほやまは夕ばえて間近き塔のさやかなるかも

この朝窓に吹入る風さむし布團かぶりてふるさと思ふ

わが着たる羽織ねちけてかたむけり心いらちて妻は直すも

あたまから埃をあみてこの二日眞晝眞夏を大掃除する

酒のみの父によく似て酒をのむ弟の顔見れば悲しも

朝に夕に酒にひたれる父の顔悲しみ見つゝ幾年を經し

一匹の貧乏蠅がまつはりて一日われと町を廻れり
今日もまた貧乏蠅を引きあて、しよんぼりとして家に歸るも
心安き貧乏神がのこくと大手をふつて門を入り來も
歩みこし路は遠けれ足跡の影さへなきに身ぶるひするも
蔦の芽は窓より入りていつしかもなげしにかけし帽にからめり
酒のみの父を悲しみ一生を酒をのまじと契ひつゞけぬ
總理大臣の姪と生れてわが妻はをりく、叔父に叱られにゆく

友の家は床も柱もびかくと光つてゐると妻のつぶやく
わが友はみな地位高き人妻となりぬと妻の淋しげにいふ
餘念なく椿を圍みつゝ誤れる吾が一生の歩みを見たり
薄曇る空のあなたに消えてゆく烟に似たりわれの一生
腰うちて痛はいまだいえなくにまた夏に入り秋に入るかも
熱高き身をひよろく、り運び來てわが膝に乗る小犬なるかも

叔父を葬る (昭和四年)

秋雨の静にけぶるこのあしたばかりと飛びし叔父の魂はも (九月二十九日)

叔父の眠る柩のうへに大いなる勳章八つ薄ひかりをり

限りなき菓子と花環に飾られて叔父は黙つて棺に寝てをり

この朝叔父ゆけりとふ聲きゝて電話の前に立ちつくしけり

六百の花環のあとを堂々と叔父をのせたる自動車のゆく

置きどなき花環を金にとりかへてバンなき人にやるすべなきか

これだけの花環のあらば何百のひと生くべきと數へ見るかも

大いなる花環のせめて十圓の金貨ならばと思ひつづけぬ

二萬圓に近き花環を庭ぬちに飾らせて叔父は寂しくゆくも

立ち代り入れ代り經のたえなくに脚がしびれて坐りもあへず

叔父を焼く脂烟りが十月のゆふべの空に黒くうづまく

秋の雨ぼつ／＼落ちて人を焼く烟うづ巻く夕べ静かに

二時間を待つ間に叔父は白骨のかけらとなりて箕みにのりてあり
限りなき人集りて家ぬちはちまたのごとくごつた返すも

本願寺の生佛様が京都から經讀みに來ます世とはなりしか

筆先に水ふくませて唇にあつれば叔父のものいふらしも

ありし日は日の暮るゝまでつめかけし人の今はも一人來ぬかも

鉢植の柿は眞紅に照りはえて佛壇の火に影のゆらめく

ありし日の得意の姿ありくくと映畫の叔父の笑顔かなしも

叔父を送る葬列の中のが妻の後ろ姿の映畫をかしも

くりかへしく節淋しくも讀まるゝ經に夜はあけんとす

三千のとむらひ人の焚く香の烟の中にむせびこもらふ

焼香の四千の人を見送りて立ちあへぬ足は棒となりしか

呪蚊集 (自十一年一月至十二年一月)

新たなる日は嚴そかにのぼりつつ大海原の静かなるかも

日ごとく落ちてはのぼりのぼりては新なる力生む大日輪

ぬひ針の尖よりもなほ小さなることになやめるわれはをかしも

ふところに五圓札あり妻のために何を買はふかと銀座をあるく

人群るる巷をゆけは淋しくて人なき路をひとり歩むも

元日の物皆うれし何となく古時計の音もあらたなるかな

一年にただ一度着る紋つきの齡としひかぞふる元日のあさ

門松も今年はたてず家ぬちはひそまりかへり物書くによき

小さな家にかへればおのづから心静まる夕べなるかも

男にはよくぞ生れし幸ありと婦人雑誌を見るたびに思ふ

夢にあらずうつつにあらず死にあらず我を超えたる境なるかな (熱を病む)

うとうととただに眠むけれこのままに覺めずもあらば面白からん

うとうとと熱高ければ眠りつつ思はんことも思ふことなし
天も地も物ことごとくぐるぐると逆にめぐれり熱をやむ眼に
しめやかに春雨ふりて夜すがらを蝦蟆の鳴く音のかそかなるかも
をりをりに投げるがごとく真直に梅の花びらまさびしく散る
名も知らぬ小さな草ぬきとれば涙ぐましき花ふるへをり
眠りたらぬ今朝の心のいらだちてよしなきことに妻を叱れり
ふうはりと湯にひたりつつしみじみと瘦せたる腕をなでゐたりけり

絶え間なく氷を砕く音さえで病院の夜の静かなるかも
病院のかなたこなたに咳く人の聲いたましう夜は更けゆく
争うて氷をくだく音さかる病院の朝のにぎやかなるも
まなざしを見つめてゐればわが心うつらうつらとすはれゆくかも
うつつにも夢にもわれに呼びかくる姿もだして唯えまひをり
この日ごろ怒りしこともあらくに蚊に攻められて心いらだつ
耳の中に蚊の舞ひ込めばくらくらと煮ゆるが如く血は沸きかへる

満身の血は沸き立ちて腹だたし知らぬ間に來て蚊の血を吸ふに
蚊を打ちて打ちそらしたる手のひらの輕きいたみはをかしかりけり
からだ中の血はいらだちて沸きかへる物思ふ身に蚊のせめくれば
こころよくひぢかけ椅子によりにつつ夕立雨の過ぎてゆく見る
悠然と椅子によりつつ窓あけて雨のしぶきを身に浴みて居り
年ごとにおいらん草のみさきさかる十坪の庭はさびしかりけり
戸もささず濤の音ききて佛像の側にいねつつ蚊帳に月見る (保田の一夜三首)

ほそぐと蟲ささやきてしづかなる夜更の寺に僧と語るも
ひえぐと身にせまりつつ山霧は蚊帳のめぐりにただよひてあり
ふとし仰ぐ大東京の青空に悠然として鳶の舞ひをり
秋晴のこの夕ぐれのいやさびしけたたましくも百舌鳥鳴き去れば
柿かぢりかぢりつつ山を上りゆく馬子は十三歌も唄はず
むくむくと海の彼方に陽は湧けり新なる力胸にあほりて (元旦の歌七首)
わが心そゝられゆくも紅にもえつつのぼる陽を見つむれば

悠然と湧くがごとくにのぼりくる大日輪の今朝の輝き
をかしくも足どりかろくわが下駄の音も新なるこの朝かな
あさなあさな屋根の上に鳴く雀らの聲はも今朝はあらたまりたり
宵月はほのかに照りて羽根の音をりをりさやにひびきくるかも
羽根の音のとだゆるたびにたからかに笑ひの聲のくづれくるかな

白風集

(自十年一月
至十年十二月)

幾億萬のいきとし生ける生きものの血を躍らする初日の光
無意識にびんのほつれ毛かいなづる指の行衛の描く線はも
一筋のあのほつれ毛に千金のおもむきありと顔に見入るも
あるかなきかの風にゆらゆらほつれ毛のゆれて眞白き頬をなぶれり
思ひ出の影のごとくにさと落つる桐の落葉の静かなるかな

ともしびをかかげさせつつわが爲に蜜柑つみ居る弟の聲

月影はしらじらさえて裏庭の蜜柑はうれて薄光りをり

山かげの小さき池にふうはりと浮く鴛鴦の背に散る落葉かな

落つる葉の音に聞き入るごとくにもぢつとしてゐる金魚なるかな

黄金の夕日をあみてはらはら落葉のころもぬぐ大銀杏

ふとし見る鏡の中のわが顔は我にあまえてはにかみてあり

肩かけの飾られた窻見廻はしてつまらなさうに去る女かな

この夜に死ぬかと思ふ聲あげて雪つむ軒に泣ける犬の子

窻あけて來よとしいへばちよろちよるとかけよる小犬の脊に雪つめり

庭の中に呼び入れやればくんと犬の子足にまつはりつくも

わが友は餘りに多きわれを知る友一人ありわれと名を呼ぶ

大方はその名も顔も忘れたる友の年賀のはがき來るかな

昨年の年賀のはがきくりかへし死にける友を數へたりけり

九十三の祖父が淋しい淋しとて聲たてて泣けり飯もはまなく

暗ければうら淋しとて火ともせば光りまばゆくさらに淋しき
限りなき往^ゆ来^きさ來^きさの人波にまされば街はさびしかりけり
家ぬちはひそまりかへり裏庭に羽根つく聲の賑かなるも
何やらんひそかなる思ひふうはりと湧き出づるとき夜の静けさ
をりくゝに相見ること知らなくに物言ひたげの瞳なるかな
小さな障子の穴にまんまるの眼のぞいて笑つてゐるも
くらやみの空に石ころなげうてばかなたに水の響遠しも

ひそやかに障子のかげにささける聲美はしき春の宵かも
逆巻ける波はくづれて返しつつかいや大いなる力生むかな
ともすれば己れ一人の世なるかにも思ふわれのあさましきかも
新なる力生るごとくにも大地ゆらくゆらめきにけり
満ちよする潮さながらの新なる力わきつつ夢さむる朝
美はしき夕べの光り蜂の巢に照り輝きて蜂はもだせり
半身は知るも知らぬもふれ合ひて電車の客のにらみあふたる

かがやかに身を装ほふて喜べる半玉見れば涙ながるる

華やかなきぬをまとうてわが前にはにかみたてるわが妻の顔

大いなる集りはてゝ小さな家にかへればこゝろ静けく

水すまし波の輪かきて静かなる夕べの水にかろくをどるも

静かなる流にゆらゆれにつつ水底に咲く河骨の花

鯉はねてのちの水面にゆらくと波のうねりの静かなるかも

ふと跳ねし鯉のうろくづタやみの寂しき水に薄びかりけり

石打てば湖の面をはしりつゝ水のしぶきは白く光れり

地に這へる桐の葉の影あざやかに朝の光にさゝゆらぎせり

するすると亡るがごとく落ちてゆく大いなる日の眞赤なるかな

くれなゐにもえさかりつつするすると落ちてゆく日の大いなるかな

何といふあゝ莊嚴の姿ども緋に炎えにつゝ落つる太陽

をろがめば涙ながるる一日の仕事をへて落つる夏の陽

わいわいと聲をからして叫びつつ遠花火見る子供等の群

ばらばらと散りて碎けて消えてのち音の静かなる遠花火かも

八月の眞晝の光りいたましうおいらん草に照りかがやくも

思ふさま柱を打ちて見たりけりいきどほろしさやる方もなく

路ゆけば名も知らぬ子がつとよりてなつかしさうにわれに物いふ

さびしさに人の子を借り半日をままことなどをして遊びけり

ばちばちと鞭打たれつつあへぎゐる荷馬車の馬は汗にぬれをり

家ぬちにまよひ込みたる子雀は恐ろしき手につかまれにけり (小雀物語八首)

水やれど水ものまなく飯やれど飯もはまなく只にげんとす

手のうちに小さな身をふるはせて逃ぐべきをりをただねらひをり

飯粒をはませてやれば嘴を烈しくふりて飯を刎ねけり

嘴に甘き紅茶をぬりやればいささか嘴を打ちて飲むかも

ここだけの飯はまんより大空に飢ゑて死ぬべく飛ばんとするも

一粒の飯もはまなく夜すがらをもだえもがきて雀死にけり

水入にさかさになりてすぶぬれて雀はかなく眼を閉ぢるたり

しらしらと霧光る朝の山峽を百舌鳥のさやかに鳴き過ぐるかな
うら枯れの土手に芝刈る人の影夕日にはえて水に映れり
大いなる日は落ちてゆく落ちてゆく遠山がねはきららはえつつ
子等は皆家にかへりてぶらんこはほのに揺れつつ夕雨の降る
交番の赤電球に雨ふりて人はいねつつ夜はあけんとす
久にあはぬ友の墓標を見つけたる染井の墓地の散歩なるかな

落日集

(自九一年一月
至九年十二月)

白ひきの唄はすたれてエンジンの音のみさかる故里の秋 (故郷の歌七首)
まるめらの香りはゆびに残りたれ皮をむきしは昨夕なりしに
戸主といふ大いなる石わが背に轉びかゝりぬよわきこの背に
父の植えし二本の桐を賣れといはれ下駄片足の値にて賣るかも
手のひらに頬白とれど飛びもせず勢よく鳴くこれの頬白

ランプ焚く小ぐらき家の隅にまで湛へゐるかも泥鱈汁の香
麥を蒔く鋏の音かろくあかつきの月まだのこる野らに互ゆるも
お雑煮がとけます早く起きませと妻がいふかも師走の今日に
二時間をぼんやり椅子にねころびて齒醫者の試験のだしになりけり
夜すがらを雪ふりつめりストオヴの瓦斯の音のみかろくひゞきて
口髯にふと見つけたる白き毛を見つめて居たり物思ひつゝ
「青い鳥」を無断で譯しこのおれがえらしと威張る人もありけり

翻譯でこの一生を終るよりむしろ風にならんとぞ思ふ

このさきを幾年生きん吾が身かも飯を食ふにも物を思ほゆ
ひもかけにからまりにける君が髪はづさんとすればいやにからまる
感冒カゼの神に妻をも子をもうばはれて狂ひたるごと友は笑へり
けだものゝ嘯み合ふごとき姿にて女ものれり朝の電車に
一日を飯もはますに寝てゐたりうとうととして思ふことなく
朝の日は地に輝きて霜柱ひそにとけつゝくづれゆく見ゆ

人をやく野火のけむりのゆらくと雨の夕の静かなるかも
劇場の夕べの光り眼の底にきらかゞやきて眠りかねつも
何やらん物の光れり近づけば影はもあらぬ春の午後かも
落日の光をあみて大佛は静かにたてり日を見つめつゝ
満點の代數幾何にほこりける友今飯を食ふにこまれり
げらぐと隣のお神井戸端に笑ひこけ居り春立ちくる日
娘三十五やつと嫁入しましたと隣のお神胸をなづるも

巻煙草はすにくはへてながしめにひとをみつむる友の妻かも
道草のあまりにながきわれなれや行く手はすでに暮れんとするに
屋根の雪地をゆるがして落つる音炬燵の中に語りつゝきく
細長きわが影めでゝ暖かき朝の陽を背に雪解路ゆく
淡雪の身に染みにけん白魚の透きとほり見ゆるあばら骨かも
ぼつぼつの點字の底にかくれたる秘密よむべく手さぐる盲人
紙の裏にひそめる秘密さぐるごと笑みつゝ點字讀む盲人かも

しめやかに春雨ふりつ人いねてぼん／＼時計一時をうてり
投げ割りしかめのかけらを手にとりて小さき心身慄ひにけり
この怒りいゆるまでとて夕ぐれを川原に下りて石を投げけり
わが家に暮れて歸ればうれしけれ小さき燈光ほのにとぼれり
誰やらん我名を呼べる心地して意あけて見る春の宵かも
この歎き石に語らん石よりもまことに吾を知るものはなし
何ものにたよらんとする心ぞもみづからをさへ信じかぬるを

さめ／＼と泣けるが如くひそやかに戀をさ／＼やく眞晝の蛙
ぶらんこのゆる／＼につれて藤棚の風なき朝の花さゆらげり
たん／＼とたん屋根うつ春雨のしづくの音は隣家にやあらん
白木蓮の花はさびしも朧ろなる眞晝の空にすくすく咲けり
緋に燃ゆるつゝじの花のいとほしも朝の日照りて眼もまばゆきに
青白き瓦斯の光はさびしけれ若葉にそ／＼雨のけぶるに
一昨日はゴム風船のごとはりつめし怒りを今日は忘れけるかも

崖下の桐にぎやかに花咲きて五月雨白く降りそゞぐかも

ぼか／＼と蝦蟇がまの鳴く夜はうれしけれ本なげすてて門かどに出て見る

あらたなる朝あしたの風を孕みちゞ若葉の海に鯉は躍れり

夕ぐれの風なき門に吹流しだらりと垂れて淋しかりけり

この日頃貴き時間むさむさと安賣しつゝパンを買ふかも

膝にだきて物いはぬ夜はさびしげにつくづくわれに見入る狎かな

青白き魂のやうなるあけぼのゝ螢のひかり見るはさびしも

あかつきの夢追ふ若き魂のごとうつらうつらにとぶほたるかも

空色の花はなつかし名もゆかし忘れな草と名をきくからに

うつとりと夢みることき姿にて笛吹きて居る盲めくらの乞食

獨樂のごと五尺のこの身くるくると腫めぐりて廻りゐるかな

追憶の夢はなつかし七色の虹にも似たる夢はうるはし

美しくしき夢を見るべく美しくしき詩を口ずさみ床に入りけり

雑草のはびこることく老いくればいよ／＼さかる頬の髭かも

神の前に佛の前に祈りける昔のこゝろ欲しと思ふに

棄てかぬる鈴蘭の花からからに枯れたるまゝに一年を経ぬ

赤電車過ぎたるあとの大通りひつそりとして犬の子いゆく（電車の歌四首）

往復を同じ電車にのりあはすこの四五日の人忘れず

したたかに足をふまれて痛いとも何ともいはぬ人うれしかり

汗くさき同性の腕ふとふれて身ぶるひにけり朝の電車に

大いなる日は落ちてゆく落ちてゆく見つゝしあれば涙流るる

大いなる瀧はうれしも山に来て一日見つつ物を思はず

泣いてく泣きたき夜なりしみじみと路ゆく人にかけもよらんか

百軒の家のたつほど金かけて伯爵邸の門は出来たり

山のぼる白衣の敷と鈴の音のふえまさりつつ夏に入るかも

日ごとく刺るひげのごと雑念のしきりにさかり静心なき

三十五反の帆をはりにつゝ曉の港いでゆく一村の船

櫓の音はかそかに鳴りて由良の門に今宵ひつそり月輝けり

いさり火は盛んにもえて人聲は浪のまにまにかそかにきこゆ

和立海は落ちてゆく日に輝きて水煮えくりかへるがに見ゆ

ものいふも一苦勞なりこの儘に啞になりたしまことの啞に

あしたくあやに花さくあさがほを見につゝあらに生るゝ心

晝の間の光をすべてあつめたるごとくに白き夕がほの花

盆踊みてゐる中にわが足もわが手もいつか踊りてゐたり

馬鹿踊くちあけにつゝつくゝと見入れる馬鹿がうらやまれけり

ほの白う咲く夕がほの花ゆらら涙ぐましう闇にゆるゝも

今日こそと力んで起きしこれの日もたゞつまらなく暮れてゆくかも

雨もよしあらしもよけれ天地のひつくりかへるやうなことあれ

ちりぐと油を煮るが如く鳴く物狂ほしき蟬の聲はも

馬と馬いななき合ひて別れけり馬子はかたみにもだし合へるを

みちに見し美人の頬の小さなるいぼが半日氣になりしかな

ふと友を思ひいでけるこれの日の夕べに友の手紙とゞけり

めすを戀ふ蟲の鳴く音のたえだえに靜かなるかも晝の尼寺

仙臺の町をあるけばどこの子も千松のやうな顔をしてをり

やごとなき玉座となりしてふ室に銅貨が三文あげてあるかな (瑞嚴寺)
音もなく姿もあらぬ大いなる力にこの身しばられてあり

虹の中にはえつゝ見ゆれ白壁の土藏目に立つ故里の家

蟲鳴かすとはんともせずちつとして机の上に今朝も居るかな

繪のやうに狭霧のなかにふうはりと浮びて見ゆる朝の我が家

百舌鳥の聲さやにさえつゝ夕暮の虹あざやかに谷にかゝれり

ふと見たる鹽の底のわが顔のさやかにすめる秋の午後かな

くらくらと煮えくりかへる味噌汁のなかに泥鰌は投げこまれけり

力強く大地をふんで歩みゆくお巡りさんの劍あらたなり

ゑらくなれ〜とて懸命に育てられし子巡査になりぬ

秋立ちて日ごと夜ごとに風鈴の音はほそりつゝ五えまさるかも

五十年笑つて損をしたやうな顔をしてゐる玩具屋のばゞ

小さなるいはれなの笑さみひろまりて笑ひこけたる裁縫室かな

この十日時計のねちのとけたよな心いだいて熱に臥しをり

草の葉の影細長く地に這うて百舌鳥鳴く聲の静かなるかも

ふと仰ぐコバルト色の夕暮れの水平線に富士浮び居り

空高み影みえなくに渡り鳥鳴く音かそかに南にわたる

鐘の音はゆるく流れてしんしんと土にしみこむ秋の夕暮

しやぼんだまもつれ合ひつつ静かなる空に舞ひつつ別れけぬるも

一錢をあげて撞きける鐘の音が奈良の都に響きわたるも

いづこよりこの淋しさは湧くものか秋の夕陽のあかくし照るに

思ふままに思へることを言ひ得たる今宵はうれし今宵はさびし

ふと見たる鏡の中のわが顔は叔父に似てをり禿げたる叔父に

物みなは静まりはてて人を呼ぶ聲さやかなり眞夜中の二時

からからと女の客の笑ひつつ歸れるあとの静かなるかも

銀杏集

(自八年一月
至八年十二月)

月の庭に素裸の銀杏影さえて寺のゆうべの静かなるかも
驕りたる王者の姿見すやとてはらはらと散る大銀杏かも
淋しげに葉をぬぎすて、驕りたる王者のごとき大銀杏かも
泣き盡し笑ひつくせる人のごと素裸淋しき大銀杏かも
人を焼く煙しづかに立ちのぼり焼場の空のほのあかりせり

疲れたる眼にいとほしも白菊の餘りに白く輝きにつゝ
素裸の桐にとまりし黒き鳥鳴かで飛びしはさびしかりけり
唇をかたくつぐみて眼をとぢて吞めば吞まるゝ憤りかも
いざ家に歸りて寝なむわが家には偽りもなしへつらひもなし
悲みの姪の骨壺かるゝと小さき穴に投げ込まれけり
人にきく慰め言を自らも云ふことなくて人に云ひけり
ゆるやかに冬の日照りて霜柱とけゆく音のかそかなるかも

病める日を子供のごとく天井の繰り返へしよむ節の數かも
病める日は百度も読みし天井の節の數さへ忘れけるかな
天井の張板の數奇數なるが氣になることも幾日になりし
暖かに冬の日の照る縁側に狎の背なでつ思ふことなし
新なる光にぬれて野に立てば新なる血は沸き立ちにけり
死ぬまでは電燈の柱わが村に入れぬと言ひし爺は死にけり
美はしく咲く毒草の花びらに淋しげに照る秋の日の暮

宵々に死ぬべきことを思ひつゝ朝あしたは更らに生きんと思ふ
生きんとも死になんとしも思はずにたゞ生きてあり生きてありたし
知る人と知らぬ人との別ちなくいだきつきたき夕なるかも
小學の首席をわれに勝ち得たる三助一等水兵になれり
嫁ぎては筆とる暇もなしといふ女の友はあまりに淋し
鐘の音は雨にぬれつゝ夕闇の草の葉つたひ土にしみゆく
水草の草の根によるうろくづの腹ひかりつゝたそがれてゆく

月の面に影をうつして飛ぶ雁のそのたまゆらの羽ばかりかも
月の坂をよき馬子唄の下りゆく女にやあらん男にやあらん
沖遠み潮みつる音のかそかにて島ほのぼのと月のぼる見ゆ
池の面は眞青になぎて底深み春の薄日に葦の芽ひかる
あけぼのゝさ霧にぬれてよろこびの嘶いなきはす駒の群かも
手のひらのしやぼんの泡の朝の日に消えゆく音のひそかなるかも
野を遠み虹あざやかに陽ひにはえて軒のしづくの静かに落つる

野を遠み夕日の村は時雨るらし馬子唄の音のゆるく流れて
水の泡の岩にからまり瀬を早みすべり落ちつゝ消えにけるかも
ぬすまれし吾にマントを貸すといふ人二人あり泣きてかりけり
互えわたる月の夜空にくろくゝと浮ぼりに似る大銀杏かも
雪の夜はあまりに淋しをりくゝの鼠の音さへしたしまれつゝ
をりくゝの鼠の聲のさえにつゝ雪つもる夜の静かなるかも
夕闇は水の面を流れつゝ蘆の芽白くうすひかりせり

掘り起すいはほに強く根をからみあるかなき芽ふけるさゝぐさ
うら若き女やもめのからく〜と笑へばいと〜淋しかりけり
青白き瓦斯の光にきらめける入れ齒さびしき女のやもめかも
中年の女やもめは淋しげに國にゆくとて家を賣りけり
みごもれる若きやもめの白粉の白きを見れば涙ぐましも
狎ころの背をなでにつゝありし日の子を憶ひやる妻の口ぶり
誰が衣を縫ふにやあらんふと見ればおらがつゞれを妻はさしをり

黙しあへば淋しけれとて語らへば春の眞晝はなほさびしかり
燈もなき室ぬちのたそがれにほのかに光る雛の顔かも
日をかけて雛をし飾れ見る人もなきものをとて妻は泣くかも
ありし日の若き憶ひに泣かんとや淋しき妻は雛をかざるも
枯れもあへで幹にからまるかづらより松のいたはしいつかれにけん
根を深く大地にからみ枯れつゝも仆れぬ松のうらやましけれ
いつ如何に何處に消えし生けりやも人知らぬ間に死なんとぞ思ふ

美しき人形くれし叔母さんが一番よいといへる姪かも

むせび音は闇にとけつゝ幼兒は星を見つめて寝入りけるかも

わが魂は忍び泣くかも生徒等の愚かなる罪われに負ひつゝ

生徒等の魂かゞやきてほゝゑれば淋しき身にも力みなぎる

わがさとす生徒の瞳うるほひてわが魂は泣きてありけり

教へ子のうるむ瞳に見いでたるわがまなざしは泣きてありけり

屠所に入る羊の如く吾が前に立てる子を見て涙のみけり

うと／＼と眠りつゝなきむせぶ子の聲にみだるゝ静かなる闇

人笑めば淋しきものを人泣けばをかしきものを狂へるかわれ

獨り居のこの一日を小さな淋しき我にあまへけるかも

冷飯をひとりかぢれば狎がきてなつかしさうに見守りてあり

高綱はよき芝居なり小屋を出てわが足どりのかろげなるかも

米倉に押しこめられて泣き居れば外には母の聲泣きてをり(幼時を憶ふ)

きら／＼ら日に輝ける葉櫻の地に置く影は淡くゆらげり

天地の夜はふけにつゝ川原には人呼ぶ聲のさやかなるかも (多摩川にて五首)

鮎釣りの絲のゆらぎをうとくと寝ころびて見る多摩川原かな

人呼べば水を隔てゝ木魂せり春ゆく多摩の静かなる夕

水の上を静に下る人聲の闇をもれ來る多摩川原かも

ゆるやかに流れを下る屋根船の屋根に残れる夕光りかも

空色の忘れな草に見入りつゝ忘れし人を思ひ出しけり

うつゝなに遊ぶ子の群見入りつゝほのにあかるむわが心かも

青ずめる空にうつとり見入りつゝみつめて居れば涙流れぬ

風すさぶこの一日のいらだゝし山にかくれて寝ばやと思ふ

この心いきどほろしく波うてりいさ犬ひきて草の野に出ん

淋しければ物狂ほしく歌ひけり電燈けして寢床の中に

美はしき若き女を前にして吾が手の皺をなでにけるかも

野を遠み秩父山脈夕ばえて八百八町いま電燈ともる

夕やみの青田の中に早乙女の歌はのこれり人はあらなくに

筑波山女山男山に七色の橋かゞよひて日は落ちんとす

この額何時しらぬ間に禿げにけんふとし鏡に向いて思へり

輝ける女と語りみづからの老いたる聲に耳をふたげり

青蟲の蝶となるらん夜なるかな空青すみて白き月照る

同じ家に身を住まへども飯はめどたゞそれだけの二人なるかも

思ひ／＼の吐息つき／＼一日を妻も黙せりわれも黙せり

食パンをひとりかぢりてこもらへば猫だに來ぬがうれしかりけり

室ぬちに闇はよどめり鈴蘭の鈴ほの白う薄光りつつ (鈴蘭の歌十首)

ほのやかに鈴蘭の香の立ちまよふ書齋にせまる夕ぐれの霧

わがために十里の路を汽車に乗り山につみしかこの鈴蘭を

蝦夷が島熊がすむてふ山奥に鈴蘭たづねて君は入りしか

輕川のその山奥にわがために鈴蘭の花あさりし君はも

鈴蘭の花をあさりて夕暮の山に迷ひし君にもあるか

鈴蘭のましろき鈴によろこびの涙をもりてかめにさしけり

鈴蘭の鈴ゆるやかにゆれにつゝほのかにほふ書齋なるかな

わがひとりめづるに惜しく鈴蘭を憎き人にも分ちけるかも

鈴蘭の鈴はこぼれて落ちにけり一閑ばりのくろき机に

教壇にわが説くことごとく偽りめきて口をつぐみぬ

いく度か馬鹿と笑はれ罵られ馬鹿といふ名がうれしくなりぬ

むつかしいもんだい出して零點が多いとこぼす數學教師

八月の眞晝の坂に力つきて駄馬は仆れぬ眼つむりて

先生はまだあの中學においでかといふ聲ききて涙のみけり

點數がたつた一點おほかりし友は大學教授になれり

吊り革に太きかひなはさがりたれよきほりもの少し見えつゝ

喜びの胸はをどれり機關車が大地をゆりてホームに入れば

ひたづかれ家にかへれば狎ころは尾をふりふりて狂ひ廻るも

帝劇の四等の切符買はなとて二時間ばかり夕やみに立つ

かゝる時金はほしけれ金あらばバヴロワもらくに見られんものを

蟬の聲は闇にとけつゝ夕月のささやくごとき蟲の音湧くも

君が魂のささやくごとくかそやかに蟲忍び鳴く曉の四時

日ぐらしの淋しき聲は君去りしその夕より耳につきけり

鉢植の苔ぬきとれば小さなる空いろの花ひそにわらへり

せめて夢に君や來もせん來ませやと寫眞ブツクを見てねたりけり

トマトオの赤きを喰はんわが胸のところに似たる赤きトマトを

相見ては思ふことなく別れてぞしみじみ生ける心地するかも

淋しければ高らに歌ふわが聲の身にしむ故にいや歌ひけり

泣きながら眠むる子のごと淋じさに歌うたひつつね入りたりけり

財布には十錢しかはなきものを乗れといふかもこの車屋は

車屋は乗れといふかも財布には煙草買ふべき錢だになきを

庭の木に名も知らぬ鳥きて鳴けり名を知らざるがうれしかりけり

山峽やまがせの静かなる村日にはえて暮るるに問なき百舌鳥の聲かも

山峽の黍のはたけにころころと引かぬ鳴子の鳴る眞晝かも

夢のなかに銀の鈴ふるごとくにもひそやかになく鈴蟲の聲

苔影集 (自六年一月
至六年十二月)

さしむかふ人の瞳にわが姿静心なくうつるさびしさ

大理石の像のやうなる顔二つ静かなる夜の温泉に浮きて見ゆ

はらくと散る花びらを身にあみて笑みつゝ立てる盲人めしひかも

雑音の中にわがすむ國はあり沈黙のくに静寂のくに

物思ふ人のごとくに風ぐるま折々めぐる諏訪の夕暮

ほろほろと山鳩ないて朝靄に松の若芽ののびてゆくらし

水鳥の動くともなくふうはりと浮きて淋しく日は暮れんとす

わが魂とわれとならびて温泉の中にふうはり浮いて夢を見てをり

夢に似たる黒き鳥の翼より闇のひろがるむさし野の原

なよなよと若き葡萄の蔓延びて力見すやと窓にからめり

天地にこのよろこびの擴がれと力かぎりに鐘つきにけり

落葉松の林の中に腹ばうてしづかに土の香をなつかしむ
ふりしきる吹雪の空に眞白なる鳩のつがひがゆめのごと飛ぶ
大空に星はながれて月見草夕べの風にいき絶えんとす
今日はしもなれし梢に鳥も來ず人戀しさの秋の雨ふる
をりをりはぬすみ見しつつさしむかふ同じ電車の女と女
鐘つけば鐘のおびえのさびしきにあわたたしくも鐘いだきけり
つく鐘の消えてゆく音のさびしさにあわたたしくも耳蔽ひけり

まどかなる月を見つめてたたずめば昂ぶる胸のいつか静めり
淋しさに森の木魂を呼びさまし物狂ほしく呼びつづけけり
淋しさに蠟燭ともししみぐと見入れば秋の身にしみわたる
小さなる蟲のささやきふとやみて忘れてをりし人憶ひ出ぬ
淋しさに蟲鳴く野らに寝ころびて眼とざしてわれもなきけり
よろこびの帆をはりあげて鰯船夕日にあかき港にいそぐ
栗の實のぼたりと落ちて十二時のゆるく打つらし山寺の晝

秋の日のころよく照る庭石の面にゆらぐ苔の花かも

手をのべて虚空を打てば淋しさのしみぐと湧く夕べなるかな

物言はぬ鳥の姿なつかしみ日の暮るるまで見つめて居たり

徒らに物狂ほしき夕べかまただからからと笑うてゐたり

嬉しげに尾をふりふりて人毎にまっはる小物は羨ましけれ

屋根の上に一羽の鳥淋しげにわれを見つめて秋の雨ふる

戀ふことを忘るべき身の淋しさは夢にたゞける鐘の音に似る

狂ほしき胸ひきさきてこの心眞白き巖に投げうちつけん

紅き血は潮の如く逆巻きて狂へとばかり身をもてあそぶ

われとわが魂の行くゑを知らぬまで空ろになりし心淋しも

人見れば人恐ろしく物いへば物さびしさにこもらひにけり

戀人を呼ぶが如くに窓あけて狂ほしければ月にささやく

なげうちて飛びゆく石のかそかなる音をさびしむ夕暮の秋

群がりに交ればいとゞ物淋し人の笑へばさらに淋しも

腹心の友にそむかれ恐ろしき敵とかたらふ面白き日や

これの世にまことの思ひ語らはんすべはもあらぬやるせなさかも

いたづらに人懐しき夜なるかな花はらくと風なきに散る

素練すねん着て眞白き駒にむちうたむ夢のやうなる春の曙

落葉たけば秋は悲しもひえびえと身にしみわたる夕暮の色

コスモスの鉢を圍りてくるくと影の輪をかく赤とんぼかな

キオリンの糸のたえける夕より吾わが子はも遂に歸らざりけり

何といふキオリンの音のむせびやうその夕より弾くにたへなく
三人がそろひて弾きしヴァイオリン糸のたえたるまゝになりをり

人形の笑

(自七年一月
至七年十二月)

天つちの物ことごとく仰がせて新たなる日のいま照りそむる (新年)

四千萬里の遠き彼方に照りそむる初日をろがむやす國の民

憎かりし人なつかしと思ふ夜は脈の音さへ静かなるかも

偽りのこの身をめぐり狂ふかな眼をとづれども耳ふたげども

小さなる柩しづかにはこばれぬ都大路に秋の雨降り

笑む聲のまだやまなくに淋しさのつと襲ひ來てをのきにけり

ほほづきを弄ぶごとかろらかに舌轉ばして女いにけり

白菊と赤き菊とが淋しげにかめにさゝれて脊を合せをり

かひなれし小狗の脊をなでやれば痛み忘れて尾をふりふるも

つくづくと見つゝし居れば人形の笑にすはるるわが心かも

笑むことを忘れたるがの淋しさに人形の笑に見とれけるかも

永久のまことの笑のなつかしく小さき人形買うて歸りぬ

圓かなる心に物を見つむれば物悉く笑みてあるかな

百八の鐘は百六つ鳴りにけりこの胸まさに躍らんとする

打しづみ物をも云はである吾を憂はしさうに狎は見守る

春の日のうららに照れば天つちの物ことごとく光に酔へり

難段の細きともしびゆらゆれて主なき難の顔のさびしも

おどろおどろ沸きかへるとき瀧つぼにつつましやかに春の雨ふる

春の夜の音もなき雨に耳よせて妻と二人が黙しゐるかも

鈍栗を拾うて居れば鐘がなる幼かりし日の蘇りつゝ

しよんぼりと日を脊に立てる丘の上のわが影さびし見るにたへなく

新なる國に生れし心地にて草ぬきとりて土の香をかぐ

温泉の中にふうわり浮いてうつとりと追分節の尺八をきく（登別にて）

朝風にめぐる小車かさぐるま諏訪はよき國心地よき國

さらさらと風なき夕の風ぐるまゆるくまはりて春の雨ふる

面しろう何やら鳥の鳴くこゑす五分停車の山かひの驛

天つちの歌にあふるる春の野を物おもひつつ一人ゆく旅

事もなげに物のことはり説きあかす教壇の人となりて幾とせ

血は沸けり胸は躍れり手は舞へりこの喜びを石にもかたらん

つゝましう眞菰がくれにさく苔の花に歌へる蟲はさびしも

葉櫻の葉のにもあさの日のゆれてくろく光れる蟻の路見ゆ

さわやかに駒いななきて六月の風さら／＼とたてがみなぶる
朝もやに姿は見えねあざやかに呼びかはしゐる駒のいななき
鈴の音はさやかにきこゆれ朝がすみ深くとさして馬は見えぬに
強き日の光におちて葉の裏に名も知らぬ蟲かそやかに鳴く
ゆらゆらと流にゆれて河骨の花ほの白う夕やみに浮く
熱き日の力にたへぬ月見草月のひかりにひそやかにさく
夜を深みいなく馬の聲さえてかそかに人の語る聲する

石打てば雀の鳴く音さとやみてかき消すごとく日は落ちにけり
峯の上に光はのこれ野の馬の物狂ほしういななきになく
さざれ波ほのかにゆれて沼のあなたよしきりの聲さやかにさゆるも
鳴く蟬の聲にまじりて名も知らぬ小さな鳥の歌のさびしも
群がりを獨りはなれて眼をとちて草はまである黒き牛かも
頬白の一日鳴いて人聲のをりをり洩るゝ山添ひの家
杉の葉の針の端先に夢のやう朝のさ霧のふりしくが見ゆ

老杉のおごそかに立つ並木路小さき人の歩み來る見ゆ

曉の淡き霧の色よりもはかなくひかる電燈のいろ

人いねてともしび淡き夜の街にしづかに強き靴の音さゆれ

燈火はさやかに見ゆれ野を寒み行けども盡きぬ路は遠しも

小さな燈火一つゆらゆらしゞまの水を流れゆくかも

野を遠み消えては光るともしびの夜霧のなかにおぼろなるかも

草の葉の光さびしも夕ばえのくれなゐもゆる陽の落ちてのち

しげる葉の葉の間もる陽のやはらかき光に照れる黒き桑の實

出飲簿に死亡の朱字^{かき}見出して名を呼ぶことをやめにけるかも

そよ風に蠟燭の炎ゆらゆれて佛の眼をり／＼ひかる

靜かなる眞夏の晝の大寺に柱のひゞる音のかそかなる

かろらかに足を運べばさやかにも鶯張の床の鳴るかも

うす闇の三十三間堂の奥ひるも鼠の威張りて鳴くも

さみだれはしとどにふりて智恩院木魚の音のゆるく流るる

七重十重佛のならば薄闇のをちこちに鳴く鼠の子かも

古への奈良の都のおもかけを想ひ見ずやと鐘なりひびく

鐘の音は物さびしけれ月澄みて鹿の鳴く音もさやかなる夜

三笠山山やく烟ゆらくと霞の中にたちぞまどへる

白粉の色に包める淋しさのさやかに見ゆれ瞳のおくに

納豆賣る老いたる婆々の力なき飯食ひたらぬ聲の細しも

熱き日をくるまの上に居眠るに俵夫は油の汗をしぼれり

飛びてゆく時の歩みもうとくと眠れるごとき八月の午後

ゆらくら水の面を渡る尺八の音のすすしく月にさゆるも

月澄める野風呂の底を見つめつゝ素裸の男ためらひてあり

青白う照る月の面をちらくとひそかに渡る鳥の影かも

渡鳥影もほのかに大空に呼かはす音のさやかなるかも

雲の上の光の海に渡鳥群れなく聲のかそかなるかも

土に生れ土にひそみて土に死ぬみゝすの命断ちし歎かも

死の舞踏をどりて舞へり眞二つにたゞれしみ、すもだえもだえて
蓮の葉のひんがしに揺れ西にゆれ乗りたる露に朝の月浮く
浮草の根に鮎の子の口ふれてひろがる波紋静かなるかも
月の夜を音を鳴きて飛ぶかりがねのもだして飛ばばなほうからまし
大寺の佛の蔭にひそくと鳴く蟲の音のあはれなるかも
戀に泣く鈴蟲の音のあまりにもあはれなるまゝ放ちやりけり
買ひたての山高帽子ふみつけてやゝに癒えけるいきどほりかも

たまくと電車の中に國なまりきゝて戀ふかも故郷の秋
たゞへたる泉の面にひそやかに松の枯葉の落ちて舞ふ晝
かしましう何やら鳥のたのしげに日すがら鳴きて秋静かなり
藻の上に浮くかとぞ見し水鳥の水にもぐりて日の暮れかゝる
線香の煙ゆらく大佛の鼻にまひこむ秋のあさかも
ごろくと白ひく音のゆるやかに夜やふけぬらしねむげにきこゆ
一つらの雁の音さえて武藏野の秋の身にしむあかつきの旅

かばかりのことに死ぬとやかくてなほ生きんとすかと妻と争ふ
己より己を誰かよく知らん知れるが故に淋しかりけり
幾億の蟲の鳴く音をかき亂し武藏の原汽車の過ぎゆく
背のびして心地よく吸ふ日光の胸にしみ入る朝の秋かも
わきたぎる怒をつゝみほゝ笑みて物いふわれの恐ろしきかな
青ずめる秋の夜の空星泣けりいざ笛吹かん星にあはせて
垂るゝ穂の穂先にかろく身をつりて黍ついでばめる小さな鳥

武藏野の蟲といふ蟲のぼり來る月をたゝへて鳴きしきるかも
故郷の妹とつぐらし何時生れ何時の間にかは女になりし

子を憶ふ

日輪の影消えしかと思ふまで物ことごとく眞黒に見ゆれ (十三首大正七年)
泣くなかれ吾も泣かじといたづらに契ひては泣き泣きてはちかふ
おのが子のなきがらなでゝな泣きそと妻しかりつつ我も泣きけり

唇に笑をたゝへてとこしへに静かなるねむり吾子はむさぼる
よくもこの心裂けずとあやしみてこよひもこの身呪ひぬるかも
つめたかるむくろ抱きて頼なでゝ生けるがごとく物がたる妻
ある時は名を呼びて見つあるときは耳そばだてゝ物にきゝ入る
彫像に似たりうるはし愛らしと接吻してはさめざめ泣くも
追憶のとばりかゝげて今宵また物語りては泣き泣きては語る
人の子の後ろ姿をあやしみて吾子ならずやと追ひかけて見る

去るものは日日にうとしと誰がいひしその偽りをはじめてぞ知る
一人ゐてはさめぐと泣き人見ては煙草ふかしていつはりもいふ
大いなる暴風雨のあとの静けさに物ぐるほしく心もだゆれ
吹き放つしやぼんの泡をさながらに光りて舞ひて消えし魂
永遠に父といふ名を奪はれて涙のうまさをはじめて知りぬ
人前にあふるゝ涙のむ時の五尺のこの身はりさけんとす
叔父さんが泣いてゐるよと笑はれて人の子の頭なでにけるかも